
おとこのおんなのこ

平山ひろてる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おとこのおんなのこ

【Nコード】

N8870Y

【作者名】

平山ひろてる

【あらすじ】

ある日、百合百合な女の子が男の子になってしまった！
これからどうしよう！ わからないわ！
ドタバタあり、シリアスあり。
何とも言えないすれ違い系ライトノベルです。

プロローグ 『おんなのこ、おとこのこ』（前書き）

ガンガンと批評よろしくお願いします。

よろしければよろしければ。

ガールズラブなのか？ どうなのか？

これは、どうカテゴライズされるんでしょうね。

プロローグ 『おんなのこ、おとこのこ』

こんな想いをしたことは、ないだろうか。

あなたが男の子なら、女の子になってみたい。女の子になって、自分の胸を揉んだり、色んな可愛い服を着たり、きゃっきゃうふふと、女の子仲間と、楽しい会話を繰り返してみたい、と思ったことはないだろうか。

あなたが女の子なら、男の子になってみたい。男の子になって、色んな遊びをしてみたい、自分のゴツゴツした、男らしい身体に触れてみたい、無茶なイタズラをしてみたい、女の子同士の世知辛い人間関係から離れ、さぱつとした男社会に触れてみたい、そう思ったことはないだろうか。

実際にそうになったら、どうなるのかなあ。

そんな喜劇の物語。そして、叶わない恋に胸を焦がす、少女たちの物語。

「ふあー……」

五月。そろそろ新しい環境にも慣れ、人々の気が緩み始めるステキな季節。

ここは、ちゅんちゅんと小鳥がさえずり、カーテンの隙間から、温かな陽光差し込むあたしの部屋。

ふんわりとした羽毛ベッドの上で、十五歳の高校生であるあたしこと、青木朱音はむくりと身体を起こす。

昨日は、夜遅くまでテレビを見てた。

『女の子同士の恋愛なんて、ゼーったいにありえない、きもちわるーい、キャハハ』とさっぱり言い切った女子高生に、悲しみを覚えながら、枕を涙で濡らしながら眠ったものだ。

『男の子になりたい』。

女の子に生まれたら、きつと一度は思うことだろう。むしろ、一度も思ったことがない子が存在するのか。少なくとも、あたしの周りには一人もいなかった。

でも、彼らとは体格も違い、バカそうに無邪気そうに、男同士で楽しげに笑う、彼らの残酷な姿を、少女は傍で見つめることになる。男の子と触れあいながら子供ながら、『男の子になる』という、その考えが達成できないことを知り、やがて、少女として生きてゆくことを決断する。

まあ、そんな小難しいことはどうでもいい。

あたしは、いわゆる『百合系女子』だ。注目すべきは、百合女子ではないことだ。

女の子が好き好き。であるけれど、まあ男の子も嫌いじゃない。どっちでもいけるが、どっちかというとな女の子が好きだけだ。男の子の友達も多いし、告白だって何回もされたことはある。

でも、愛してしまったのは、男の子じゃなかった。

まあ、そんなこともどうでもいいのだ。

叶わない夢を見続ける中で、やがて現実を見つめねばならない。ぼうつとする頭の中で、小難しいことを考えたからか。

どうも、おかしな夢をまだ見てしまっているようだ。

あたしの髪の毛は、ふわりとした肩まで伸びた地毛の茶髪、身体は絹のようにすべすべで、胸も人並み以上にあるはずだし、街を歩けばそれなりの人間が振り向き、厄介な人間に声をかけられる。そんな程度の女の子。

であるはずなのだが。

サイズに余裕があるはずの、お気に入りのパジャマは、どこか窮屈で。

身体が違和感の塊になってしまったような、おかしい感覚がする。「へええ……？」

ふと、自分の胸を見ると、割れた風船のようにしぼんでいた。ふっくらとした胸は小さくなり、まるで男の子のようになっていく。

小さくなった、なんて簡単に表現できるものではない。ぺったんこすぎる。

こんなの、悪い夢だ。

どうして一夜にして、あたしが貧乳にならなくてはならないのか。こんなものは悪い夢に決まっている。まだ、悪い夢を見ているのだ。

だからこそ、あたしは頬を軽くつねってみる。

痛い。夢じゃなかった。

この貧乳化事件は現実で、あたしの胸は実際にしぼんだのだ。

「どうして……？」

いや、胸だけじゃない。

声も、何となく自分のものではないような、そんな感覚がする。どちらかというと、ソプラノ寄りの声色だったはず。しかし耳に入ってくるあたしの声は、オクターブ下がりのアルトボイス。

ぺったんこになったただけではなく、喉までやられてしまったのか。しかし、なぜ、どうして。様々な疑問が、起き抜けの頭に浮かんでくる。

そこであたしは、一つの嫌な予感を頭に浮かべた。

もしかしたら、男の子になってしまったのでは？

アニメや小説、ゲームではよくあることだ。

朝起きたら、少女が少年になっていた。

第一話 『おんなのおとこのこ』

「ちよちよちよつと父さん！ 母さん！」
ばん、と勢いよくリビングの扉を開く。
すると。

「あらあら？」
「どちらさまだい？」

リビングのテーブルに向かい合って、楽しそうに何かを話していた男女が、あたしの顔をじいと思つめた。

中性的な顔立ちで、もう三十後半のおっさんのクセに、未だに会社の同僚に男女問わずモテるといふ、父さん。ちなみに彼は英国人を父に持っている。

もう一人の女性は、元モデルで今もたまにテレビに出ており、わが親ながら美しい母さん。あたしの容姿は、きっと彼女から受け継いだものだろう。

「それどころじゃないの！ 男の子になっちゃったの！」
思いつきり叫ぶが、二人はくすくすと笑って、こちらを見つめている。

「おはよう、朱音」
「なんでそんなに冷静なのよおおお！」
あまりにも父さんは冷静すぎて。

「その声で叫ぶと、変な人に思われるわよ？」
あまりにも母さんは平常運転すぎる。

「で、でもお……」
何だ、この二人。

あたしが男の子になったというのに、何の反応もないのか。

「とにかく、落ち着きなさい。朱音」

「うん……」

「見た目は、そこまで変わってないわ」

「ほんとに？」

僅かな希望が見えてきた。

容姿が少女そのものなら、『男の娘』として生きることにも出来る。

「うん。父さんそっくりよ」

「えええ……」

ちよつとシヨック。

父さんそっくりってことは、普通に男寄りじゃないか。

娘じゃない。男の子だ。うわん。

「そんな嫌な顔しないで欲しいなあ。僕に似るのはそんなに嫌かい？」

「嫌じゃないけどお……」

父さんは中性的な顔をしてるし、かつこ悪くはない。

どちらかと言えば、モテるほうだろうけど。

「別にいいじゃない。朱音、あなたは男の子になりたがってたでしょ？」

「そうだけとお……」

確かにそうだ。

あたしは、男の子になりたかった。

男の子になれば好きな人に告白して、付き合っ、結婚できるかもしれない。

女の子同士だと、それさえ叶わない。

同性婚しようにも、好きになった相手が百合少女じゃなければ、想いは成立しないし。

百合少女が悲恋の結果を迎える。

そんなドラマや小説の風潮が、あたしは大っ嫌いだった。

だからこそ、この変化（変身？）は喜ばしいことではある。

あるのだけれど。

何か割り切れないなあ。

そんなことを考えるあたしを尻目に。

「じゃあ市役所行かないとね、母さん」

「そうね。今日はお仕事休めるの？」

「はは。大事なことからね、有給を取るよ」

「そう。じゃあ市役所行きましょう」

「そうだね、行こう。帰りに久しぶりに遊ぼうか」

父さんと母さんは、二人で何やら話を進めていた。

市役所？ 休む？ 一体どういうことなのだろう。

「ど、どうしたの？ 父さん、母さん」

「性別が変わりましたよーって、言いに行かないといけないじゃない？」

「このままだと、朱音は女の子のままだからね」

「ちよつと待って、そんなのでいいの？」

性転換する人も、このご時世多い。

多いけれどもあたしのこれは、性転換と言えるのだろうか。

手術とか、そういう話の前の問題ですけど。ねえねえ。

「はは。お役所仕事だから」

「何とかなるわよ、何とかな」

「ええー……そうなのー？」

父さんと母さんが言うのであれば、そうなのだろう。

きつと大丈夫なのだ。たぶん。

「で、でも、父さん母さん」

「ん？」

「どうしたんだい？」

「あたし、これからどうしたらいいの？」

女の子が、ある日男の子になった。

そんな非現実、経験したこともないし、聞いたこともない。

「男の子になるしかないわね」

「そうだね」

母さんと父さんは、顔を見合わせて頷き合っている。

「どうやって？」

「朱音はもともと、男の子みたいなものだし、今まで通りでいいんじゃないかな」

「そうね。化粧品もいらないだろうし、お洋服代も浮くわ」

確かにそうだけど。化粧品とが高いし。朝の忙しい時間にファンデとか乳液とか化粧水とか、色々準備するのもだるいし。それがなくなるだけでも、かなり楽にはなるだろうけど。

「う、うん。でも、学校は？」

こればかりは、どうしようもない。

いきなり、男が女であるはずの『青木朱音です』と主張して、校内に入っても、不審がられて通報されるのがオチだ。

「そうねえ……」

「お友達に聞いたらどうだい？ えーっと、汐里ちゃんに」

「しおりんに……？」

頭の中に、友人であるお嬢様の姿が思い浮かぶ。

高飛車で、どこかいけすかないが、何故か親友ポジションに落ちていた少女。

「理事長の娘さんだし、きっと何とかしてくれるわよ」

「何とかなるかなあ……」

うーん。

『あら、あなた誰？ 近寄らないでくださいな』とか言われるような、そんなオチが見えているが。

「そうよ。電話してみなさい」

「はい。じゃあ、今日は学校休まないといけないうってことなんだ」

「そうなるわね。まあ、汐里ちゃんと話みなさいな」

「はい……」

あー、ゆーつつ。

男の子になれたのは嬉しいけど、女の子友達にどうやって説明すればいいのか。

よくよく考えれば、今まで苦労して維持してきた、女の子同士の

コミュニティにも参加できないんだよね。

これからの学校生活、一体どうなってしまうんだろーなあ。

さて。父さんと母さんは出かけていった。

市役所に、あたしの性別が変わったと告げに行くと言つ。

笑い飛ばされるのが関の山だと思つただけど、彼らは根拠のない自信のようなものを持っていた。

根拠がさっぱりわからない。

でもまあ、とりあえずだ。

「早く来てねお願い、泣き顔……っ。送信」

電話をしたら、声で男だとバレ、警戒されてしまう。

そんな心配をしたあたしは、メールで家に呼びつけることにした。家に呼びつけたこと自体は、今まで何度もあったことで、おかしなことじゃない。

ただ、あたしが男の子になっている、というおかしなことを除けば、おかしなことでもなんでもない。

「返信はやつ！」

『すぐ行きます』

メールを送ったら、簡単な返事がすぐに来た。数秒後に来た。

さすがあのツンデレお嬢様は非常時には優しい。ツンデレなだけある。来てくれると言つので、とりあえず自らの容姿を、洗面所にある鏡の前に立ってチェックしておく。

「……男じゃん」

顔立ちは本当に、父さんに似ている。

女なのか、男なのか。

顔だけを見ればあまり見分けのつかない、中性的なものになっており。すべすべした絹のような肌は変わらず、肩までかかる、茶色の短髪も変わっていない。

でも、身体の骨格と筋肉が、そこはかとなく変化してる。

それにちょうどいい具合に、ぷにぷにだった身体は、筋肉でかち

かちになつてる。細い腕に、しつかりとついた筋肉。

力を入れなければぶにぶにしているけど、入れると鉄のように固い。

全力でぶん殴れば、壁に穴が空くのではないだろうか。そんな錯覚すらある。

身長もちよつと伸びてるし、色々は無茶苦茶だ。

小さかったお尻は、少し大きく男の子っぽいものに変化して、もはやはいっていたパンツなんて、ぴちぴちになって、ゴムが緩んでいた。

「これじゃ絶対にしおりん、わかってくれないなあ」

どうしたものかなあ。

今の自らを写真に残し、過去の自分に見せたならば、絶対にその写真があたし自身だとは信じないだろう。何となく似ているかも、とは思うだろうがほとんど別人だ。

「とりあえず、着替えるかな……」

このまま待つていても仕方ない。

こんな無茶苦茶なパジャマ姿でいても仕方ない。

幸いなことに今のあたしは、父さんとあまり背が変わらなくなってるし、父さんの服を借りよう。うん。そうしよう。

そう決めて、あたしは父さんの部屋へと向かうのだけれども。

その時、ぴんぼーん、とインターホンが鳴った。

「あれ？」

さすがに、しおりんが来る時間ではない。

先ほどメールを送ったばかりだし、彼女は学校に行く準備をしていたはずだから、絶対にここに来るはずがない。

宅配便とかその辺りだろう。

「あー、もう。めんどくさいなあ」

母さんがいるときに来て欲しかった。

今は非常事態だ。あたしはとても困っているのだ。

そんな時に、来訪者の対応なんてする余裕があるわけない。

一人の少女の姿。

夜の闇のように黒い髪を、可愛い白いのリボンでまとめてツイ
ンテールにしている。その顔立ちは端正で、造形美に満ちており、
ぱっちりとした吊り目、ぷっくりとルビーのように赤い唇を持っ
ている、あたしに負けない程度の美少女。

黒崎汐里。

通称、しおりん。

あたしと同じ学校学年で、十五歳の高校一年生だ。

中高一貫校である我が校全体をまとめる、生徒総会の副生徒総長
でもある。

「きゃああああ！」

その彼女が、顔面を真珠のように白くして、甲高い声で叫んだ。

「しおりん可愛い声出すね」
可愛い。

こんな声を聴いたのは、結構久しぶりのことだ。

「ど、どうして、どうしてわたくしの名前をつ！」

「やだなあ、そりゃ知ってるよ。何でも知ってるよ。しおりん、右
のおっぱいの下あたりにホクロあるよね。ちっちゃいの」

「へ、変態っ！」

「変態って何さ……」

失礼しちゃうわ。

あたしは百合少女だけど、変態じゃない。ノーマルだ。

「女物のパジャマ着てるくせに、どこが変態じゃないのです！」

「だって着替える途中だったし」

「き、着替え？」

「うん」

ゆっくりと説明しないと。

あたしが男の子になった。そう相談しないといけないのだけど。しおりんは、そろりそろりと背を向け、あたしの前から去っていった。

「そ、そうですの。じゃあ失礼しますわね……」

「待って、ちよつと待ってしおりん」

その肩に手を掛け、軽い力で抑えたつもりだったが。

「いたっ!」

「あ、ご、ごめん」

意外に力が入ってしまったようだ。

本当に軽く、力を入れたつもりなだけだ。

「まだ何か御用ですのわたくしは早く電話しなければいけないところがあるのです」

「どこに電話するの?」

振り返り、むすつとした顔であたしを見つめるしおりんに、尋ねてみると。

「そ、それは教えられませんわ」

「あたしとしおりんの仲じゃん」

「あたし?」

「うん」

どうしたのだろう。

しおりんは、顔を青ざめさせているけれど。

「やっぱり変態ですわああ! 早く警察に電話しないと!」

失礼な。

やっぱり何も変態じゃないのに。

って、それどころじゃない。電話するって警察にか。

そんなことされたら、あたしの人生設計が狂ってしまう。

何としても理解してもらわないと。

「ち、違うんだってばしおりん。あたしは朱音、朱音なんだよ」

「男じゃないですか!」

すかさず入る突っ込み。

「お、男の子になっちゃった」

「意味がわかりませんわ……」

「うん……だからね、ちよつと説明させて欲しいんだけど」

「よく見ると、朱音さんのお父様にそっくりですけれど……」

「でしょ？」

「でも、それはあなたが朱音さんだという、証明にはなりませんわ」

「そうだなあ……えーと、右のおっぱい横にあるホクロ」

「殴りますわよ？ そんなの、わたくしを盗撮すれば、すぐにわかるじゃないですか変態」

ひゃあ、盗撮犯だと勘違いされている。

決定的な証拠だと思っただけだなあ。

「そ、そうだよね。ごめん。えーと……」

うーん。

あたししか知らないことで、あたしがあたしだって証明できる証拠。

何があるだろう。父さんと母さんがいてくれれば、簡単に証明で

きたんだけどなあ。

「出来ませんか？」

「ちよつと待つて、今考えてるから」

「……はあ」

やれやれ、といった感じでいつものように、ため息をつくしおりん。

いざ、自分が何者かを説明しろ、と言われると結構困る。それなりに困る。どうやって自分を証明すればいいのか。

特に、あたしは女の子から男の子になってしまった。

自らの身分を証明するものなんて、存在を認めてくれた親以外に誰もいないし。

「この前、遊園地行ったよね、一緒に。アイス食べたじゃん」

「そんなの、朱音さんを追いかければわかるでしょう」

即断。

あら、今度はストーカー疑惑。

しおりんの盗撮犯かつ、あたし自身のストーカー疑惑。

困った。非常に困った。ダブルスコアだ。

「うーんじゃあ、この前、数学のノート見せてあげたよね」

「見たのは、朱音さんのほうですわ。ノート真つ白だったじゃありませんか」

「そうだったっけ？」

「はい」

即断。困ったなあ。あたしとしおりんしか知らないこと。

それでいて、誰も知りえるはずがないこと。それを探すのって案外難しい。

「んー……」

アニメとかゲームなら、すぐに納得してくれるはずなんだけど。

あんまり都合よくいかないなあ。

「じゃあ、どうやったら信じてくれる？」

「小学校二年のわたくしの誕生日のとき、わたくしにくれたものは何ですか」

「頭にチヨップ」

即答。

簡単なことだ。小学校のときの話。

クラスメイトであった、いけすかないお嬢様の誕生日パーティーに乗り込み、頭にチヨップをかましてやった。そこから、何やかんやとあって、その娘とは友人になり、現在まで関係が続いているのだ。

「それを知ってるということとは……」

「信じてくれた？」

「はい」

良かった。警戒を解き、笑顔で頷くしおりん。

これで、話を次の段階に持ってゆける。

「それは良かった」

「でも、どうして朱音さんが男の子に？」

「ちよっと詳しく話したいから、中においでよ」

「はあ……」

「詳しく話すほど、あたしも自分の現状に詳しくないんだけどね」

「じゃあダメじゃありませんの」

その通りだ。

女の子に戻るのか、それとも男の子のままなのか。

原因は何か、どうしてこうなったのか、そんな問題を解決することはできない。

しかし。

「でも、しおりんにしか頼めないこともあるし」

「そ、それなら仕方ありませんわね」

頬を赤らめて俯くしおりん。

可愛いじゃないか、お嬢様。

ずっとそんな感じで、しおらしくしててください。

「うん。じゃあいこ！」

「その前に！」

「うん？」

何で止められたんだらう。

「服、……着替えたほうがいいですわ」

「あ、そ、そっか！」

ぴちぴちの女物パジャマ、明らかに違和感がある。

冷静なしおりんの突っ込みに、自らの異常を再認識した。

「……はい」

「じゃあ、先にリビング行ってね！」

うーん、どうなるんだらう。

期待半分、不安半分。先が全く見えない。

そして、リビング。父さんのものであるジーンズとシャツを着て、

とりあえずはこれで済ませる。これであたしは、見間違えることなき、男の子だ。

あたしとしおりんは、何とも言えない気まずい沈黙の中、テーブルの椅子に座って向かい合う。

何を話せばいいのか、頭の中に話題は浮かぶのだけど、声が出ない。

「朱音さん」

「は、はい」

「声、上ずってますわよ」

「そ、そう？」

「はい」

しおりん、冷静だなあ。

「緊張してるんだよね……。しおりんは、驚かないの？」

尋ねると、顔色一つ変えずに彼女は答えた。

「正直、わたくしは動揺しています」

「そうなの？」

「今すぐに来い、というから、必死に走ってきたのですが」

「そうなんだ……」

ありがたいお嬢様だ。

本当に、こういうところは優しい。ツンデレだし。

それにしても早かったよね。すぐに来てくれたよね。

「そしたら、朱音さんが、男の子になっているのですから」

「あはは……」

「どうして、そうなったのですか？」

不思議そうにしおりんは尋ねるが。

「わかんない。朝起きたら、男の子になってた」

あたしにも、原因や理由はさっぱりわからない。

「よくわからないですわ」

「あたしにもわかりませんわ」

「……本当に、困っているのですか？」

目を細めて、やや非難するようにしおりんは語る。

「困ってるよ！ すげー困ってるよ！」

「そうは見えないのですけど」

「困ってるって！ だって、いきなり男の子になったんだよ？」

「常日頃から、『あー、男の子になりたい』って言ってたじゃありませんか」

痛いところを突かれた。

「そ、そうなんだけど。って、それ母さんにも言われたし！」

「なら、いいじゃありませんの」

「うん……そうなんだけど……」

「なら、わたくしは帰りますわね」

席を立ち、リビングから去ってゆこうとするしおりん。

「えー、ちょっとまってちょっとまって」

あたしも続いて立ち上がり、彼女の肩をがっしりと掴む。

するとしおりんは振り返り、あたしの顔を見つめてゆっくりと語る。

「わたくし、少し気持ちを落ちつけたいんですの」

「そんなに動揺してる？」

「ええ、かなり」

「ふうん……」

そうは見えないけどなあ。

彼女の姿は、いつも通りの冷静沈着な姿そのものだ。

「まさか、朱音さんが男になるなんて……」

「やっぱりダメ？」

「ダメというわけではありませんが……、戸惑いがありますわ
やや言葉に詰まりながら、しおりんは言う。

「そっか……」

「一番戸惑っているのは、あなたでしょうけど」

「そうなのかなあ、戸惑っているのは間違いないんだけど」

「とりあえず話はわかりましたわ。でも、少し時間をくださいな」

「う、うん」

透き通った目が、あたしを射抜く。

いつにもなく優しく丁寧で、しおりんは語り続ける。

「落ち着いたら、また電話をかけますわ」

「でも、そんなに戸惑ってる？」

「ドキドキです」

「ふうん……」

イタズラ心がふと心に芽生える。

その気配を察知したのか、あたしを警戒する彼女。

「ど、どうしましたの？ その眼は」

「いやあ、あたしが戸惑いをほくしてあげようかなって」

軽いスキンシップのつもりだ。

いつもやってることだし、別におかしなことではない。

「え？」

しかし、まさかあたしが今、そんな行動に出るとは思わなかったのか。

「えいっ！」

「きゃあっ！」

突然あたしに胸を触られたしおりんは、物凄く可愛い声をあげた。

何この子、女の子ってやっぱり可愛い。

「ふわふわだなあ、やっぱり」

「や、やめっ」

頬を朱に染めながら、しおりんはあたしを振りほどこうと、必死に身体をよじらせたりしているけど、今のあたしの力は以前よりも強い。なかなか振りほどけずにいた。

「やめないよーやめないよー」

「やめろって言うてるでしょうっ！」

すると、思い切り脳髓に、強いチョップを食らわされた。

「あー！」

痛い。結構痛い。

本気で攻撃したな。

「わかっていきますの、あなたは男。男なんですから、そういうことをするのは、もうやめてくださいまし。もし、誰かに見られでもしたら……」

「でも、中身は女の子だもん」

「調子が狂いますわね……」

はあ、とため息をつくしおりん。

「元気出た？」

とりあえず、何だかいつもの調子に戻ってきたように思う。

先ほどまでのしおりんは緊張というか、戸惑いというか、驚愕というか、様々な負の感情が入りまじっているような、そんな雰囲気を漂わせていたけど。

「ええ。どこかのバカが、考える気を吹き飛ばしてくれましたわ」

「ひどいっ！ バカを強調するなんてっ！」

「とりあえず、出かけましょう」

頭の中に不平を浮かべていると、しおりんがあたしの手を引いて、玄関まで歩いてゆこうとする。リビングの扉を開き、玄関へと至る廊下を歩く。

柔らかな手の感覚が伝わる。雪のように解けてしまいそうなほど、柔らかな手に引かれながらも、あたしは尋ねてみる。

「どこに？」

「美容院に行って髪を切って、それから、お洋服を買いましょう」

「お洋服はとにかく、えー、髪の毛切るのー？」

「残念ですけど、似合っていますわ」

ふう、とため息交じりに背中を見せながら、しおりんは語った。その背中に向かって、あたしは問いかける。

「本当に？」

「本当に」

「絶対に？」

「絶対に」

「シヨックだなあ……」

結構お気に入りだったんだけどなあ、この髪の毛。

性別が変わると同時に、さよならしなければいけないのか。

「そんな奇妙な出で立ちだと、紗希ねえもびっくりしますわ」

「そ、そう？」

思わぬ名前が出て、あたしは驚かされた。

彼女の姉、『紗希ねえ』はあたしたちの学年の一つ上で、先輩にあたる。

「はい。気持ち悪い、と言つと思えますわ」

「そこまでかなあ……」

紗希センパイは、とても優しい人だ。

幻想的で目を離せば消え入りそうなくらい、ぼんやりとした人だが、強い包容力を持っている。本当に優しく温かい人なのだ。

「人には、人に合った出で立ちがあります。朱音さんのそれは、合ってますんわ」

「わかった。紗希センパイが嫌がりそうなら、そうする」

「……そう、ですか」

「ん？ どうしたの？」

「何でもありませんわ」

「うん、それならいいんだけどね」

何やら、微妙な反応だ。

しおりんと、彼女の姉である紗希センパイは、昔からあまり仲が良くない。というか、しおりんが一方的に嫌っているようにも思う。だって、そう見えるんだもん。

何か理由があるのだろうけど、しおりんにそれを尋ねると、毎度はぐらかされるので、聞くのを諦めた。

でも、いい機会だから聞いてみよう、そう思った矢先のこと。

「それから、学校にも行かなければいけないでしょう」

「学校に？」

やがて、廊下を経て玄関に到着。タイミングを失ってしまった。そうこうしている間に、しおりんはがちゃりと玄関の扉を開き、あたしと彼女は家の外に出た。

玄関の外、道路には、黒塗りの高級車が停められていた。車のドア近くには、年老いた運転手さん。見知った顔のおじさんだ。あれに乗って、ここまでやってきたのだろう。

しおりんの姿を確認した運転手さんが、優美な動作でドアを開くしおりんとあたしは彼に軽く会釈を交わし、車の中へと乗り込んでゆく。

座席ふかふかだなあ。くそう、ブルジョワジーだなあ。そんなことを考えていると。

「青木朱音（女）は転校したことにして、青木朱音（男）を編入させなければならぬでしょう」

隣に座ったしおりんが、あたしの顔を見つめて語りかける。でも、かつこおんな、とか、かつこおとこ、って。何だか、不思議な気持ちだなあ。

「できるの？」
何はともあれ、今のままでは、あたしはただの不審者。

しかし、編入という体裁を取れば、正当なる生徒として扱われる。そこを何とかしてもらうつもりで、最高権力者である、理事長の娘しおりんに、緊急連絡をしたのだ。願ったりかなったりなんだけど。

「あの学校は、わたくし達、黒崎家のものです」

「そうだけど……うーん」

何だか、この期に及んで割り切れなくなってきた。

そんな中、車はゆっくりと走り出す。

「朱音さん！」

あたしの戸惑いと悩みを乗せて進む車中、しおりんがあたしの目を見つめ、語りかけてくる。

「はいっ！」

思わず、元気よく返事をしてしまった。

「あなたはこれから、男として、生きていかなければなりません」

「は、はい」

「元に戻る保証は、一切ありませんわ」

しおりんの小さくも、しっかりとした声があたしの心の中に浸透してくる。

その通りだ。

一生、このままかもしれないし、明日には戻っているかもしれない。

「ない……ね」

「もしかしたら、戻れるかもしれませんが。その時は、その時ですわ。あなたがそれを望むのかどうかは知りませんが、今は、男として生きる決意をしてくださいな」

少なくとも、今は。

男の子として、生きなくてはならない。

「不安、なんだ」

しおりんの優しい口調に、思わずあたしは心の内を吐露してしまっただ。

嬉しさと、辛さの入りまじった微妙な感覚。

誰に伝えようにも、伝えることのできない胸の痛みと切なさ、そして楽しさと感動。

それが、不安を引き起こしていた。

「不安ですか？」

「うん。男の子になれたのは嬉しいんだよ？ でも、何だかこれからどうなるのかって、全然わかんないし、もやもやしたままだし」

これなら、あたしが好きな人にも告白できる。

うまくいけば、あたしはその人と付き合える。恋人になれる。

でも、とあたしは思った。

「嬉しいなら、よいではありませんか」

「そうなんだけど……」

「細かい事は、後で考えればよいのですわ」

さっぱりと、しおりんは言い切った。

「かなあ」

「面倒なことは、わたくしが処理してさしあげます。あなたは、わたくしの大事なお方ですから」

「そ、そう？」

そう言ってくれるのなら、とても心強い。

さすが親友だ。

「……とにかく、わたくしに任せてくれますわね？ わかったら、

一人称を変えてくださいな。俺か、僕で」

「うん、ありがとう。しおりん。お、俺も頑張るよ」

「お気になさらず。朱音くん」

ぱあっと、明るい笑顔を見せてくれるしおりん。太陽のような明るいこの笑みは、あたしの不安を吹き飛ばしてくれるような気がして、とても心強かった。

そして、あたしの呼び名は、朱音さんから、朱音くんになった。

微かに希望が芽生えた、あたしたちを乗せた車は、道路を進んでゆき、あたしたちの運命をゆっくりと、変えようとしていた。

その後、美容院で髪の毛を整え茶髪はそのまま、ショートカットにした。

ちょっと後ろ髪を引かれる思いはあったが、しおりんが良いと言ったので、そのまま任せた。男物の服も、しおりんと一緒に選んできた。

代金は、今度黒崎家の大豪邸で住み込みの手伝い、らしい。

何度かしたことはあるが、あれは手伝いという名の、遊びなのだ。さすがに、ここまで気を遣ってもらっては悪い。でも、しおりん

は譲らなかった。

ありがたいなあ。本当に。困っているときに助けてくれるのが、本当の友達だって言うけど、しおりんは間違いなく本当の友達だなあ。

そして、学校に到着。

ここは、私立北宮学院高等学校。

共学の中高一貫校である、北宮学院の高等学校で、あたしはその一年生であった。

しおりんは中高の生徒合わせて総勢二千四百人から成る、『生徒総会』の副生徒総長であり、それなりに大変な雑用の日々を過ごしている。

生徒総会規約の前文には、こうある。

『北宮学院は黒崎の私有財産を運用して運営される学究施設であり、生徒の自主性を尊重し、生徒活動を主体的に行わせるため、生徒総会を置く。生徒総会は北宮学院理事会理事長の意思決定を補助する機関として置かれ、生徒総会の決定は、理事長の承認を経て、北宮学院の公式な決定事項として扱われるものとする』。

小難しいことが書いてあるが、内容は簡単だ。

簡単に言い換えれば、生徒総会の力は強大であり、学内における理事長一家、黒崎家の力は、相当に強いということだ。あたしを何とかするくらい、何ということはないのだ。

時刻はもう放課後で夕方。

生徒の数はまばらで、茜色の夕焼けが校舎を包んでいた。

しおりんは、というと学校に到着して早々、面倒くさい書類の提出に、理事長室へと向かっていった。理事長といっても、自分の親なのだから慣れたものだろう。

あたしは、というと、部室にいた。

『英語研究会』。

構成員は総勢三人。あたしは諸事情から、正式な部員ではないのだが、暇を見つけては、こっそりと顔を出していた。

あたし、しおりん、そして、もう一人先輩がいる。

構成員はたったそれだけの、ちっぱけな部活であり、英語研究会という名前なのに、英語を全く研究していないという、あまりにも愉快で、学校からクラブ活動費をせしめるためだけに、存在している部活であった。

それでも、楽しい日々を送っていたし、あたしは満足していた。

「はあ……」

たった一人の先輩で、英語研究会会長。

英語研究会会長であり、しおりんの姉、紗希センパイ。

今はこの部室に居ないから大丈夫だろうけど、何の説明もしなければ、部室に居座る怪しい男相手に、口から泡を吹いて倒れてしまいかもしれない。

紗希センパイは、極端に人見知りをする人なのだ。

「どうなるかなあ……」

人見知りをするセンパイ、彼女は特徴ゆえに周囲から浮き、虐げられていた。

彼女の妹であるしおりんには言うな、と本人から固く口出しを禁じられていたので、そのことを話すことは一切なかった。

それでも、あたしに優しく接してくれたので、あたしも出来る限り、彼女のためなら何でもしよう、と思い動いていた。

それでもいじめは決して止まず、問題は更にエスカレートした。その度にあたしは沈静化に走っていたけど、結果はよろしくなく、暴力沙汰もよく起こし、退学騒動に発展したこともある。

そのとき、紗希センパイは『朱音ちゃんがいってくれたら、それだけいい。関係がないのに、迷惑はかけられない』と語り、最高の

笑みを浮かべた。

どうしようもない。

この人を守ってあげたいけど、あたしじゃ無理だ。

彼女でもなく、家族でもない。肉親でもなければ、親族でもない。

あたしと、紗希センパイの間には、何の繋がりもなかったのだ。

その時になって初めて、あたしは男の子になりたいと思った。

男の子になって、紗希センパイと付き合えば。関係と繋がりを持つてば。

この人を助けてあげられる。そう、本気で思い始めたのだ。

前々から口だけでは言っていたが、本格的に考え始めたのは一年前の、その事件があつてからだ。

切ない。

切ない話である。

「はあ……」

ため息をつくあたし。

これからどうしよう。

紗希センパイは、本当に人見知りをする。

しかも、いじめられているからか、人を信用しない。信じられないのだ。

このまま、編入して、英語研究会に再び顔を出したとしても、紗希センパイと付き合えるのかどうか、それは最後までわからない。

好きな人いるのかなあ、わからないけど、いるなら難しいだろうなあ。

あたし、根本は女の子だし。本職に勝てるのかなあ。

ハードルたけえ。純粹に、あたしはそう思った。

しかし、さおりん遅いなあ。

そろそろ来てくれても、いい時間だと思っただけだなあ。

そんなことを、思い始めたときだった。

がちやりと、英語研究会のドアが開かれた。
過疎化しているこの部室にやってくるのは、あたしを除けば二人だけ。

一人はもう学校にいないであろうと考えれば、残るのはしおりんのみ。

「しおりん、遅かったねえ」

あたしは扉の方を見ずに、机にだらーっと、上半身を投げ出しながら言う。

ん？

「……」

あれ？

いつもなら、冷静な突っ込みが入るはずなんだけどな。

「どうしたの？ しおりん」

もしかして、呆れてしまったとか。

そういう感じなのだろうか。

心配になりながら、あたしは開け放たれた扉を見つめる。

そこにいたのは。

「あ……」

思っていた、しおりんではなかった。

そこに立っていたのは、どこか怯えた様子を見せる一人の少女の姿。

秋の稲穂のごとき金色が微かにかかった、セミロングの艶やかな銀髪を、しおりんと同じリボンで、ポニーテールにまとめていて、彼女の透き通った眼は、赤ワインのようにワインレッドに染まっている。それに、可愛らしいメガネを装着しており、落ち着いた調子を演出している。

きめ細やかで色素の薄い肌の色は、穢れを知らない新雪の白を纏っ

ており、水晶のごとく薄く、幻想的で、今すぐにも消え入りそうほどだ。

この人こそがもう一人の、英語研究会会員であり、会長。
あたしが、紗希センパイと呼ぶ人間であり。

二年生の黒崎紗希、十六歳。

そして、あたしの想い人だ。

でもでも、どうしてここにいるのか。

時間は放課後、紗希センパイはきつと、もう帰っているものだと
思っていた。

「紗希センパイ……どうして……？」

「だ、誰……？」

小さく可愛らしい声で、怯えを表現する紗希センパイ。
やっべえ。

本当にまずい。

まさか、ここで彼女に会ってしまうとは。

全く考えていなかった。

「あああ、あた、あたしは」
動揺。

心臓がバクバクと激しい音を立て、リズムを刻み始める。

どうすればいいのか。どうしようか。

混乱で思わず、あたしと言ってしまった。

余計に滑稽だ。余計に奇妙だ。このままでは、あたしはただの変
態男じゃないか。

「……」

小さな身体を更に縮まらせながら、紗希センパイはあたしのこと
を見つめている。

彼女にとっては、あたしは今までの『青木朱音』ではなく、『見
知らぬ男』なのだ。怯えるのも無理はない。

「ま、待つてください！ 逃げないで！」

「こ、こないで！ 警察呼びますよ！」

だから説明しようと、紗希センパイに近づこうとするのだが。

彼女は、ぶるぶる震える身体を収めるためか、両手で、ぎゅゅと胸の前に握り拳を作り、必死に怪しい男に抵抗しようと画策していた。

「警察なんて必要ないですから！ 全然必要ないですから！」

「っ……」

「えーと、その、えーと」

どうにかして、紗希センパイを信頼させないと。安心させないと。その手段として、何とかひねり出したのは、しおりんの名前だった。

「そうだ、生徒副総長が来ますから！ 待つてください！」

「あの子の……知り合いですか？」

疑いの眼差しを向ける紗希センパイ。

うわあ、心に来るなあ。

せっかく、経験値を積み重ねてきたRPGゲームのデータが、一夜にして吹き飛んでしまったような。

そんな切ない感覚がする。

「……はい、そうです」

でも、頷いておかないと。

今はまだ、自分が『青木朱音』であると、カミングアウトすることはできないし、カミングアウトしても、疑い深い紗希センパイのことだ。

信じてくれないだろう。

「……本当にですか？」

「はい。しおりんの、えーと、友達です」

やはり疑う紗希センパイのもとに、あたしはゆっくりと歩みを進めてゆく。

さすがにちょっとは信じてくれたのか、身体の震えは収まってい

た。

といつても、まだルビーのように赤い目には、怯えの色が滲んではいたけど。

「そ、そう、なんですか」

必死に声を振り絞る彼女を見て、あたしは内心複雑な気持ちがある。

見知らぬ男と話すのは嫌だが、自分の妹であるしおりんの友達だから、無視するわけにはいかない。

そんな葛藤が滲みだしているのが、明白に見えていた。

「えーと」

この気まずい空気。

一体、どうしたらいいんだろう。

戸惑う中、あたしは、ゆっくりと紗希センパイのもとに、歩みを進める。

紗希センパイは小柄で、女の子であった時からそうだったけど、見下ろす形になる。

「な、何ですか？」

あたしを見上げながら、困惑の表情を浮かべる彼女。

「今度、この学校に編入してくるようになった、一年生の青木朱音って言います。それでえーと、この部に入部させてもらいたいなーって、思うんですけど」

「あおきあかね……？」

疑問の表情を浮かべる紗希センパイ。

その顔はどこか疑わしげでありながら、何だか嬉しさを表現しているように思えた。

「はい。青い木に、朱色の朱に音です。あおきあかね」

一瞬、驚いたように目を見開いて、

「そう……なんですか。あなたと同じ名前の子が、この部活にいます。……その子は、女の子なんですけど、ね」

楽しみに、紗希センパイはどこか遠い目を浮かべながら、あたし

に語る。どうしてだろうか、女の子、の部分が強調されていたが、まあ関係のないことだろう。

「ごめんなさい、それ、あたしです。」

それに、もういません。

「……何となく、あなたに似てるような気がしますけど。もしかして、ご親戚とか?」

不思議そうに尋ねてくる紗希センパイ。

敬語だが、これはいつもの紗希センパイだ。

彼女は自分の妹に対しても敬語だし。

あたし相手にも、常に敬語だった。

「えー、あー、関係ないと思います。俺、知りませんし」

「……そうですか」

「はい」

出来る限り、ボロを出さないように語る。

そりゃそうだよな。

紗希センパイが信じてくれるかどうかでなると、怪しいところになるし。

後々、タイミングを探して説明していけばいいや。

その時。

開け放たれたままの扉から、声が聞こえた。

「何をしてるんですの?」

「あ、しおりん」

「朱音くん、ちょっとこちらに」

入ってくるやいなや、しおりんはあたしの手を掴み、部室の外に出てゆこうとする。

そんな、こんな中途半端なままは嫌だ。

「でも紗希セ……」

「こっちに来いと、言っているのです」

しかし、強く引かれる手の力に、

「ハイ」

あたしは、ただ従うことしかできなかった。

「では紗希ねえ、また後ほど。早くお家にお帰りになってくださいまし」

「……はい」

本当に姉か。紗希センパイは、目も合わせずにこくりと頷いて、部室内の椅子へと腰かけた。そしてあたしたちは、彼女に背を向けて部屋を出てゆく。

「行きますわよ」

黒崎家という、金持ち一家に生まれた姉妹二人。

もう少し、仲良く生きられないものなんだろうかなあ。

廊下を歩くあたしとしおりん。

どうして、しおりんはあんなに姉に冷たいのだろう。

「ねえ、しおりん」

「何です？」

「どうして、紗希センパイにそんな辛く当たるの？」

「女言葉、やめたほうがいいですよ」

「う……どうして当たるんだ？」

「紗希ねえが、そう望むからですわ。それ以外の理由は、ありませんの。わたくしはシスコンですから。決して、仲は悪くありませんの。仲は」

「……」

いつもこうだ。

この姉妹はこうやって、いつもあたしをはぐらかす。はぐらかして、答えを見えなくさせる。何か大事なことがあるなら、言うてくれればいいのに。

あたしたち、親友じゃなかったっけ？

第二話 『混沌とした学園生活の幕開け』

翌日。

あたしは、男の子になる前と同じクラスに、編入することになっていた。

男物のブレザーや、新しい学生証は即座に用意され、必要なものは全て揃った。

さすが副生徒総長。さすが黒崎家。バックアップ体制は、完全というわけだ。

「兵庫県の桜花学園高校から、編入してきました。青木朱音って言います。よろしくお願いします」

ぺこ、と黒板にチヨークで名前を書き、お辞儀をする。学校名はでっちあげた。あたしたちの通う北宮学院は関東にあるし、バレるわけがない。

「あー、仲良くしてやってくれ。席はそうだな……」

「わたくしの隣に」
「わかった。黒崎の隣に行け、おいそこの列の奴らは、少しずつ前にずれる」

頭を上げて、周囲の人間を見ると、奇異と好奇の視線を送ってきていた。

くそつ、見世物じゃないんだぞ。

その中、不安そうにあたしを見つめる、しおりんの姿が何とも言えず、頼もしく、心強かった。

父さんや母さん以外にも、あたしが実は女の子なんだ、という事実を知っている人がいる、あたしは、結構恵まれているのかもしれない。

そして、あたしの男の子としての生活が本格的に始まった。

のだけれども。

ホームルームが終わり、ちょっとトイレに行こうと思った矢先のこと。

さすがに、これはしおりんに、ついて来てもらうわけにいかないしね。

「なあなあ」

「んあ？」

「よう、よろしくな。俺は山岡だ」

早速、男に絡まれてしまった。

悪いことではないのだが、面倒くさい。

追いかけてきやがった。

「はあ……よろしく、山岡くん」

こいつの名前は、山岡雄太。

確か十五歳。

あたしたちの組の男子のリーダーのようなもので、ちよくちよく

あたしに絡んできていた人間だ。

嫌いじゃないが、うざい、という問題がある。

ちなみに、しおりんの友人ではある。

「呼び捨てでいいよ。なあ、お前、もしかして青木の親戚か何か

？」

「青木？」

あたしのことだろう。

あたしのことだろうが、知らないふりをする。

「ああ、知らないならいいんだけどな」

「誰？」

「青木朱音って、お前と全く同じ名前の女がいたんだよ。何か、入

れ替わりで転校していったけどな。残念だ」

「ふうん。そいつが転校して行って、寂しいとか？」

「ああ、寂しいな」

「へ、へえ」

まさか、あたしのことが好きだったとか。

そうという言葉が聞いたら面白そうだと、興味で聞いてみたのだが、意外に真面目な顔をして話すものだから、少しギャップで胸が躍った。

「あいつとなら、本気で殴り合いができた。楽しかった」

しかし、次の瞬間には胸の鼓動は消沈。

あたしは、山岡とよくガチの喧嘩をしていた。

「へえ？」

「まあ終わった話だな。何かの縁だろ、よろしくな。青木」

あー、きゅんとして損した。きゅん損。

やっぱり山岡は山岡だ。頭の中まで筋肉まみれの、バカだ。

「ああ」

「でもさあ、その青木は、俺のことをうぜえうぜえって、殴ってきたんだぜ。うざくねえよな、俺」

初対面の人間に、そんなことを話す人間は、ウザくないのか。

そんなことを思いながら。

「まあ、そんなこともあるんじゃないの」

「そうかねえ」

「ああ」

軽く流してやる。

満足して去っていくかな、と思ったらしっかりと横を歩いていた。

まさか、ついてくるつもりか。

「なんでついてくるんだよ」

とあたしが言うつと。

「え？ いや、連れション行こうと思って」

けるつとした口調で、山岡は語るが。

「っ！」

頬が熱くなるのを感じ、あたしは思わず、山岡の横腹を思いっきり殴ってしまった。

「いでえっ！　なんで殴るんだよ！」

「ご、ごめん」

「力つえーなあ、青木。一瞬気が遠くなっただぞ」

「ああ……」

やっぱり、しおりんの時もそうだったが。

あたしの力は、かなり強くなっているようだ。

山岡は身体を鍛えているし、よっぽどのがなければ痛がらない。

「なんか、武術やってんの？」

そう彼が疑うのも、当然のことだ。

「いや、何もやってない」

気をつけないとなあ。

下手すると、周りの人間をケガさせてしまう。

「へえー。すげえな」

そんなことを話している間に。

男子トイレまでやってきた。

正直ドキドキだ。ドキドキだけど、一応、昨日予習しておいた。

大丈夫なはず。うまくできるはず。そう信じたい。

トイレの前に立ち、山岡に向かって語りかけるが。

「……一人で行きたいんだけど」

「そんなこと言うなよ。行こうぜ、青木」

「ちよっ」

彼は、あたしの肩を抱いてトイレの中へと進入してゆく。

言っているとおかしな話だけど、現実には男同士なんだから、おかしなことはない。

あー、別におかしなことじゃないんだろうけど、あー、何だかもやもやする。

もやもやするなあ！

そして。

「どうです？ 男として暮らすというのは」

クラスメイトの質問攻めも終わり、授業も午前中のものは全て終え。

今は、昼休み。

屋上のベンチに座り、あたしとしおりんは、弁当を食べながら二人で話す。

山岡は振り払った。しおりんの名前を出したら、簡単に引いた。何故か知らないけど、あいつは妙にしおりんに優しいんだよね。

「疲れたー」

「初日に体育というのは、それはそれで大変でしたわね」

「そう！ それも大変すぎるんだって！ スプレー、スプレー使いすぎ！」

「体育終わったあとの教室、凄くスプレーの匂いしますものね」

「しなかったらしなかったで、すっげー汗くさいんだけどねえ……」
なかなか辛いものがある。

動きまくるもんなあ。そりゃ汗も出るよ、匂いもするさ。

「匂いフェチに目覚めたのですか？」

そんなあたしを、じいとお見つめるしおりん。

弁当を食べる手が止まってるよ。早く食べて、そんな話題する前に。

「そんなわけないだろー」

「そうなのですか」

「女の子の匂いなら歓迎だよ」

女の子の匂いは香水だの、コロンだの、何だと批判されることも多いが。

あの匂いだって人それぞれだ。いい匂いをさせている子は、いい匂いなんだ。

「おっさんくさいですわ」

「すみません……」

ぺし、っと頭を叩かれた。

しおりん、もうちょっと乗ってくれてもいいのに。

「そうだ、こんな話はどうぞ？」

「どんな話です？」

「山岡と、連れション行った話」

箸をぱたり、と弁当箱の上に置き。

「謝るなら、今のうちですわよ」

素晴らしい笑顔を浮かべながら、しおりんはあたしに言い放つ。

「はい。すみませんでした」

恐ろしい。

笑っているのに、目が全く笑っていない。

「ゴハン食べてるときに、何て汚い話をするんですか。信じられませんか」

「すみませんでした」

「全く……」

「そういえば、女子の間で何か話題あった？」

「朱音さんが転校していったことを、残念がる話も出てましたわ」

「へえ……」

何だろう。

嬉しいなあ、何か、ほっこりする。

そう思った矢先のこと。

「その後すぐに、昨夜にあったお笑い番組の話に、シフトしましたけど」

「え？ 何？ 俺の人氣って、お笑い番組以下だったわけ？」

「それはともかく、朱音くんのほう、人氣ありましたわよ女子の間で」

何だか、しおりんはあえてスルーしたような。

ちよっと、あたしの人氣がどうなのか、教えて欲しかったけどね。

「マジでっー！」

元気が胸の底から沸き起こってくる。

女子相手に人気がある、それは嬉しいお知らせだ。

「目の色を変えないでくださいまし」

「はい……」

「カッコカワイイ、だそうです」

「えー、どっちなの？ かつこいいのか、可愛いのか」

中途半端だなあ。

どっちかにしてほしい。

「どっちつかずなんでしよう」

「ひどいつー！」

「まあ、悪評が立つよりはマシでしょう」

「悪評は何かあった？」

「『可愛い子ぶってて、ちょっとうざくない？』という評価が、ク

ラスの某女子から

「俺は男だっつーの！」

正確には女の子だけど！

もう男の子だから！ その評価はおかしい！

「グループに属していない子の話ですから、気にしないほうがいい

かと。基本的には、高評価ですわ」

「それでもなあ……」

「まだ動作に女性的な部分がありますから。そこは直したほうが良

いでしょう」

「うー……」

直せるかなあ。

動作は、染み付いちゃってるものだしなあ。

「これから、何とかありますわ」

「そうかなー……」

十五年間、女の子として生きてきたのだ。

女の子であるときは、動作が乱暴で男っぽいと言われたこともあ
るが、男の子の基準で見ると、やはり女の子っぽいのか。

難しいなあ。染み付いたものだし。

「そういえば、英研に入るのですか」

「うん。入ろうかなあって。でも、前と同じ感じかなあ」

前と同じ感じ。

正式なメンバーではある。

あるのだが、英研のメンバーであることは、他の皆には秘密になっていた。

そうすると、紗希センパイに言われたから、そのようなふわふわな状態だった。

「なるほど」

「うっ、うん……」

「なら、前と同じように振る舞ってくださいな」

「わかってるよ」

あー、結局あたしは何もできないのかなあ。

しおりんの声を聞きながら、そんなことを思っただった。

そして、放課後。

副生徒総長であるしおりんは生徒総会に出ていて、今は一緒にいない。

こっそりこっそりと、昨日と同じ部室棟の一室にある、英語研究会の部室へと足を向けるあたし。

今日は昨日よりも時間が早く、人の数もそれなりに多い。

誰か他の生徒に見られてしまったては困るため、辺りをきよきよると警戒しながら、誰もいないタイミングを見計らって、ドアを開いて中に進入する。

「誰もいないーか」

昨日と変わらぬ部室。

ここに、あの人がいた。

「紗希センパイ……」

何というか、あの人に惚れたのは単純すぎる理由だった。

あの人は可愛いのもあるし、触れたら壊れてしまいそうな、硝子細工のような儂さを持っているし、性格も良く、一緒にいて心の安らぐ人。

でも、理由はそれだけではなかった。

それは……。

「入部希望ですか？」

「ひゃあっ！」

突然の背後からの声に、あたしは思わずその場で飛び上がったしまった。

そして、焦りながら振り向くと、紗希センパイがいた。

「あ、昨日の……」

「こ、こんにちは！」

「……どうぞ、座ってください」

さすがに二回目なので慣れてくれたのか、引きつった笑みを浮かべながら紗希センパイは、手を差し伸べて、椅子に座ることを勧めてくれた。

「は、はい」

「あの子のお友達ですか？」

「は、はあ」

萎縮してしまう。

昨日はあんな騒ぎがあったから、まともに顔を見ていないし。

怯えが滲んだ笑みだったが、それでも他の女子の数倍可愛い。

「そうなんですか」

「はい……」

「えーっと。この部活、英語は研究してないです。もしも、英語がやりたいって言うのなら……」

「知ってます！」

「? どうして?」

不思議そうに首を傾げる紗希センパイ。

英語研究会なのに、英語を研究していない。

なぜなら、この部活は、紗希センパイが中学生のときに作り、妹と二人でいるためにこしらえた空間だから。

「あ、え、えーと、しおりんから聞きました」

でも、正直に答えるわけにはいかない。

その事実を知ったのも、紗希センパイと打ち解けてからなのだ。

「ふふ。そうなんですか」

「……」

「また、入部届書いてくださいね。えっと、改めて、自己紹介します。知ってるかもしれないけど、黒崎紗希。二年生で、ここの会長やっています」

知っている。

他の誰よりも、あなたのことは知っています。

それでも、そのことを言い出すことが出来ない辛さに、あたしは胸の痛みを覚えた。

「……」

「どうしたんですか？」

そんな事情を知らない紗希センパイは、ただ首を傾げるばかりだった。

「い、いえ。あた……俺の名前は青木朱音って言います。一年生で、

昨日転校してきました」

「朱音くん、綺麗な茶髪ですね」

「はっっ！」

健気に笑いながら世間話をしようとする紗希センパイに、思わずきゅんとした。

何だこの可愛い生き物、彼女にしたい。

「あ、なれなれしかった……ですか」

「そんなことないです！ なれなれしいのはウェルカムです！」

「そうですね」

「まさか、髪の毛を褒められるとは思いませんでした」
いつものやり取りだ。

あの、楽しかった英研でのやり取りだ。

「髪の毛以外にも、いい所がありますよ」

「どこですか？」

「えーっと……」

真剣に悩みながら考える紗希センパイに、

「ないなら言わないでください」

あたしは思わず、いつもの調子で返してしまった。

「ご、ごめんなさい。何だか、本当になれなれしくしてしまって」

「あ、ああ、そんなつもりで言ったんじゃない」

取り乱すあたしたち。

何だかぎくしゃくしているが、何だか楽しくて。

「……ぷっ」

「笑っていないで、いい所探してくださいよー」

「そうだね……。目とか？」

これから先、うまくやっていけるような、そんな気がした。

「目なんて褒められてもなあ……」

「あの、朱音くん」

「はい？」

「わたしを見ても、何とも思わないんですか？」

そんな中、ざわりと不穏な空気が流れた気がした。

「可愛いですよね」

「そ、そうじゃなくてですね……」

「他に、何を思えばいいんですか？」

紗希センパイは戸惑っていたが、あたしには理由がわかっていた。彼女の肌は色素が薄く、髪の毛も微かに金色がかった白だ。

瞳は赤ワインのような色をしている。紗希センパイはカラーコンタクトを目に入れていているわけでも、髪の毛を脱色しているわけでもなく、外人であるわけでもない。

「それは……」

言葉に詰まる彼女。

「可愛いとしか、思わないです。俺は」

紗希センパイは、いじめられている。

正確には、存在しない人間と扱われている。

ほとんどの生徒からは、暴力を受けているわけではなく、腫れ物に触る扱いを受けている。いないように扱われ、友達もおらず、ひたすらに避け続けられてきた。

「……朱音くん」

女子のみならず、男子までもが紗希センパイを無視していた。

そんな中で、物言わぬ紗希センパイを、面白がって物理的にいじめめる女子も、男子も存在していた。

「まだ……会ったばかりですけど」

ゆえに、彼女は孤立していた。

「朱音くんは、気持ち悪いって思わないんですか？」

「思わないです」

この人が、悪いわけじゃない。

この人に、原因があるわけではない。

「そう、ですか」

「はい」

あたしは即答し続ける。

彼女の存在を肯定するように、あたしの存在を認めてくれた彼女に縋るように。

「……ごめんなさい。変なことを聞いて」

「いえいえ」

「わたし、アルビノなんです。そこまで深刻じゃなくて、軽いものなんですけど」

「へえー」

アルビノ、生まれつき身体の色素がない、もしくは薄い人間をそう呼ぶ。全世界どこでも生まれるもので、黒人にもアルビノはいるし、日本人も例外ではない。

「ただ、肌と髪の色も白いですし、目も赤いでしょう？」

「ワインが飲みたくなりますね」

「あはは。面白いことを言いますね」

その容姿ゆえに、紗希センパイの存在は学内でも有名だ。

その名前は中高に知れ渡っている。

有名だが、ほとんど会話に上がることはない。

下手に会話に出して、この学校を取り仕切る理事長を刺激して、自分に不利益が降りかかることを、皆が嫌がるのだ。

しおりんの場合は、乱暴だが積極的に他人に関わりとうとする。

だから、理事長一家の娘で、権力者であっても、友達の数も多い。でも、紗希センパイは他人に関わりとうとしない。

だから、状況が変わらない。変えようともしていない。

全てを諦めて、ただ流れる時間のままに身を任せている。早く、理事長にチクればいいのに。無理なら、しおりんに言えばいいのに。

それはともかく。

だから、英研には部員がない。

ここは紗希センパイのための、言うなれば聖域なのだ。そうなってしまう。

「何だか、朱音くん。何年も一緒にいたような、そんな感覚がします」

「え？」

「あ、いや、何だか、安心できるような気がするんです」

「俺ですよ」

「汐里の友達だからでしょうか」

「かもしれないです」

それ以上に、あたしとあなたは数年も仲良くしてきたんです。

泣いた顔も、笑った顔も、苦しんだ顔も、喜んだ顔も、まるで恋人のように見てきました。

「これから、仲良くなれるでしょうか」

今まで培ったものを、全て放棄して。

「なります」

ここから、また全てを始めなくてはならない。

実はあたしが朱音なんだ、とカミングアウトするのは容易だ。

「ぶっ。なりません、ですか」

しかし、無邪気に笑う紗希センパイの心は脆く、壊れやすい。

そんなことを言ってしまったら、何か全てが崩れてしまうような。

あたしは、そんな気がしたのだ。

だから、そつと心の奥底に言いたいという気持ちを隠して、笑った。

「はい」

「でも、朱音くん」

「はい？」

「この部室の外では、一切関わらないでください。部員であることも、隠してください」

「……」

予想通り。

紗希センパイも、しおりんと同じで。

「わたしはもう、誰かを巻き添えにしたくないんです」

「紗希センパイ、俺は」

「何も聞かないでください」

いつも、あたしの投げつける疑問をはぐらかす。

昔からそうだ。

ずっとそうだ。ずっとはぐらかされ続けてきた。

「……紗希センパイ」

「わたしに関わって、いいことなんて何もありませんから」

「そんなことないです。どういうことなんですか」

「すぐにわかりますよ、理由なんて」

どうせ、理由なんて自分が爪はじきにされているから、関わったあたしが迷惑を被ることになる、とかそんなものだろう。

「……」

でも、直接それを彼女の口から聞くことはまだ、できない。

この時点のあたしは、そのことを知るはずがないのだから。

「簡単なことです。すぐに、わかります」

「そんなっ……」

「お願いします。わたしに希望を持たせないでください」

「希望……?」

何の話だ。

希望とは何か。

「わたしは、大切な人を失いました」

そう語る彼女のワインレッドの瞳は、どこか遠くを見つめているように見える。

もはや届かない思いを、心の底へと必死に沈めているように見えた。

「え?」

「多分、その人は、わたしが関わりすぎようとしたから、いなくなっってしまったんです」

小さく、淡々と、諦めの混じった声で紗希センパイは語る。

誰の話をしているのだろう。

彼女の前から姿を消した、大切な人。

「誰のことですか?」

紗希センパイに、大切とまで言わせる存在。

あたしは思わず、嫉妬で胸の中が支配されてゆくのを、感じてい

た。

「昔のことです。ちょっと、昔の話です」

「……」

でも、それを聞くことはまだできない。

男の子になったあたしは、まだ紗希センパイと出会ったばかり。

そんなすぐに、深い話を聞くことはできない。

じれったいけれども我慢しておかなければ、今後の交友関係すら潰しかねない。

やがて、紗希センパイは口元をゆるめて、安心したように笑う。

「じゃあ、それをお願いします。汐里とは、仲良くしてあげてくだ

さい」

「はい」

「でも、本当に朱音くんは、朱音ちゃんに似てます」

「え？」

「あ、えっと、朱音くんに入れ替わりに、転校してしまった女の子なんですけどね」

「ああ……」

紛らわしいなあ。

紗希センパイが語るのは、女の子のあたし。

彼女と今話しているあたしは、女の子のあたしではなく、別人だ。

実際は別人じゃないのだけれど、それを知っているのは、両親とあたし、そしてしおりだけだ。

「本当に、どこに転校してしまったのでしょうか……」

「メルアドとか、携帯知らないんですか？」

まあ、答えはわかりきってるんだけど。

メルアドも携帯番号も、紗希センパイは教えてくれなかった。

「……わたしが馬鹿なばかりに、聞くことも、教えることも出来なかつたんです」

小さな声で呟く紗希センパイ。

しかしあたしは、一つ大事なことを考え付いた。

「でも、紗希センパイは黒崎家の人間ですよ。そこを何とかして、教えてもらえないんですか？」

「もしも、紗希センパイがその辺りの情報を知ることが出来るのなら。」

「いずれ、あたしという存在の、ちぐはぐさに気が付いてしまうだろう。」

「転校先のはずの学校には、あたしは存在しておらず、同名の生徒が、あたしの転校と同時にこの学校に編入してきている。」

「そうなれば紗希センパイの不信は増大し、やがて信頼の崩壊につながる。」

「これから先の、紗希センパイを彼女にするための計画には、その辺りを詰めておく必要があった。」

「わたしは、学校運営には関わってないんですよ。転校先を聞くにも、汐里は教えてくれませんし。」

「へえー初耳です。」

「心の中でガッツポーズを作る。」

「残酷なようであったが、あたしにとっては幸運でもあった。」

「そうでしょう。出会ったばかりですからね。」

「あ、は、そうですね!」

「それはそうと、朱音くんは、どうしてこの時期に転校を？」

「えーとですね……」

「さて。」

「バレないように、これからの生活、立ち回らなければ。」

「バレないように立ち回りながらも、しっかりと紗希センパイの好感度を上げる。」

「これは、かなり難易度の高いことだぞ。」

「でも、せっかく男の子になれたのだ。チャンスは生かさなければ。そんなことを考えながら、紗希センパイとやり取りを交わし、そ

して時間が経ってゆくのだった。

翌日。お昼時。

あたしは、色々と面倒くさいことがあって、しおりんとの昼食に遅れた。

「ふう……よいしょ」

「お疲れですわね」

「ちよつと面倒くさいことがあってね」

「面倒くさいこと？」

きよとんと首を傾げるしおりん。そんな彼女を尻目に、あたしは彼女の隣にちよこんと座り、手に持っていた弁当箱を開く。

「ヤンキーに絡まれたんだ」

女の子であった時も絡まれた。この学校はなかなか治安が悪いというか、出る杭をとことん打とうとしてくる。

理事長の娘と共に行動する、茶髪であり、屈強な男。狙われないほうがおかしいのかもしれない。

「それは大変ですわ」

「簡単に返り討ちにできたけど。ワンパンチワンキック」

上級生で、それなりに強いはずだ。

強いはずだけれども、あたしは簡単に倒すことができた。

「それは大変なことですわね」

「やっぱり、力が強くなってるなあ」

「前よりも、ですの？」

「うん。ちよつと殴っただけで吹っ飛ばし」

あまりにもあっさりすぎた。

ちよつと、軽く小突いてやろうと思ったら、思いっきり吹っ飛ばんだもの。

もしも本気で殴ったら、空を飛べるんじゃないだろうか。もちろん、相手がね。

「元々、暴力系でしたものね」

「おしとやかな女子でいたかつたんだけどね」

「仕方ありませんわ。山岡さんと殴り合いをしているのですもの」
「だなあ」

「鬼女神の青木、中学のころから有名でしたもの」

「あのバカのせいだねえ」

事あるごとに、あたしたち二人にからかい、絡んでくるバカ、山岡。

あまりにも鬱陶しくて、顔面にパンチを叩き込んでやったのは、中学一年の授業開始、一週間のことだった。

「力が強いことはいいことですわ。まあ、周りには引かれますけれど」

「友達多かつたよ？」

過去を振り返りながら、あたしの周りにいた人間を頭に思い浮かべる。

二ケタ、いや、三ケタはいただろうか。結構な数の友達が、全校にいた。

「あれは友達じゃありません」

「はずなんだけどなー？」

「えー」

「舎弟ですわ」

「そうかなあ……」

そんなはずはないんだけどなあ。

「ナイフを持った屈強な男を、血まみれになりながら殴り倒した女。舎弟の数人や数十人できるに決まっています」

「でも、毎朝パンくれたし、ジュースもくれたよ？」

「上納品じゃないですよ」

「いじめられてたら、助けてあげたし」

「みかじめ料ですわね」

はあ、とため息をつきながらしおりんは語る。

あたし自身は要求したこともないし、自分自身がやりたいから、

助けたただけだ。

もつと言えば、評判を上げて、紗希センパイにいい顔をしたいだけだった。それなのに相手の子たちはあたしを、用心棒のような存在だと、認識していたのだろうか。

「えー。違うよー、友達だよー」

何だかシヨック。

「そういうことにおきましよう」

「しおりんは友達だよね？」

おずおずと尋ねると、

「さあ、どうでしょう」

彼女はくすりと笑い、自分の弁当箱の中から、可愛らしいたこさんウィンナーを箸でつまみあげ、口に中へと放り込んだ。

「そこは即答してほしかったなあ」

「悪友みたいなものですわね」

「そっかー」

何だか安心。

あたしって、単純だなあ。

「そういえば……、昨日は部活行きましたの？」

「うん。行つたよ。紗希センパイ可愛いよねえ」

単純だよな、あたし。

「のろけ話は結構です」

「のろけじゃないよっ!」

「はいはい」

さらりと流されてしまった。くそっ。

「のろけたいんだけどなあ」

「紗希ねえは、攻略難易度が最高ですわよ」

「そっだよな……。応援してよ、しおりん」

「前にも言つたでしょう。わたくしたち姉妹は、基本的に相互不干渉。彼女がそう望むのですから、わたくしは妹として、関わるわけにはいかないのですよ」

何だかよくわかんないけど、しおりんは自らをシスコンだと呼ぶ。シスコンだからこそ、姉の命令は絶対で、決して逆らわないのだという。本当に、紗希センパイはそれを望んでいるのだろうか。

「うーん……わかんないなあ……」

聞いたところで、きつと彼女は答えてくれない。

そんな状態を、何年も繰り返し返していたのだから。

「まあ、難しい姉妹なのですわ」

「難しすぎだよなあ」

「まあ……」

いつも通りのやり取り。

そんなものを交わしていると。

「オラア！ 青木！」

屋上の扉が勢いよく開け放たれ、包帯を巻いた金髪のヤンキーが、あたしを思いつきり睨み付けていた。その後ろからは、四人五人の同じような量産型ヤンキー。

「あー、さっきの先輩方」

「あー、じゃねえよ。よくもやってくれたな！」

めんどくさいなあ。

「朱音くん、これは……？」

「さっき倒したヤンキーさん。……後ろにいて、絶対に前に出ないで」

「は、はい……」

立ち上がるうとするしおりんを制止しながら、あたしはゆっくりと弁当箱を、怯えている彼女に手渡し、すつくと立ち上がる。

「転校早々女連れなんて、良い身分じゃねえかよ」

「一人じゃ勝てないからって、群れを組んでボコりにきたんですか」
ヤンキーは、仲間を呼んだ！

「うるせえ、転校生の分際ですよ！」

しかし、全員雑魚だった！

「早く来いよ、雑魚ども」

どうせ、そんなオチが見えてる。

あたしがイヤラシイ笑みを浮かべて挑発すると、ヤンキー先輩方は憤怒に満ちた表情を浮かべて、一斉に殴りかかってくる。

「っ……………！」

「おらあっ！」

まず一人、動作が大振りだ。

するりと身体を避け、一発腹に重いものをぶち込む。

「当たってないですよ」

「かはっ……………」

その場に崩れ落ちる、量産型ヤンキー先輩一号。

まず一人、ノックアウト。いとも簡単に潰れてくれた。

その様子を、最初に喧嘩を売ってきたヤンキー先輩が、包帯まみれの身体を震わせながら、睨み付けていた。

「青木っ……………！」

「ほんと、群れても雑魚ですね」

何ということはない。

今のあたしは、この学校で最強と言っても過言ではない。

それは言い過ぎかもしれないけれど、この場では最強だった。

「あれ？ もう来ないんですか？」

いとも容易く一人目をのしてしまったことで、他のヤンキーたちは萎縮していた。

なあんだ、面白くもなんともない。挑発しても、乗ってこないのかなあ。

そう、たかをくくっている。

勇敢な包帯ヤンキー先輩が、猪のように猛進してくる。

「青木いつ！」

「そう来ないと……………なっ！」

単純だなあ。

簡単すぎるなあ。

大振りな動きをはつきりと見切って、あたしは軸足をしっかりと地面につけて、蹴りを先輩の脇腹に入れる。

「がっ……！」

瞬間。

崩れ落ちる身体。

骨のきしむような音。

自分でも、恐ろしくなった。

男の子になっただけで、ここまで威力が変わるとは。

気絶して、地面で伸びている包帯ヤンキー先輩を見つめながら、

あたしはそんなことを思った。

「まだやるんですか？」

しかし、感情を隠しながら、抑揚のない声で言葉を紡ぐ。

「お、覚えてるよっ！」

すると。

ヤンキー先輩方は、あたしに敗れた二人を回収し。

捨て台詞を吐き捨てつつ、そそくさと退場してゆく。

なんだ、他の人たちはびびってしまったのか。

面白くないなあ。

「大丈夫か、しおりん」

「え、ええ……」

「何かされたら、すぐに言ってくれよ。ぶっ殺しに行くからさ」

「わたくしを誰だと思ってるのです。生徒総会を実質的に取り仕切る、生徒副総長で、黒崎の娘ですわよ」

この学校において、生徒総会の権限が強い人には、理由がある。黒崎家の人間を、次の経営者として育成するために、副生徒総長として配置しているのだ。全ての議論は、副生徒総長の承認を経なければ、成立しない。

責任は全て副生徒総長のものとなり、損害が発生すれば、いくら

黒崎家の人間といえ、損害賠償を請求される。その中で順調に運営を行っているのが、このしおりんだ。

副生徒総長の資格には、黒崎家の人間であり、中高の生徒であることが求められる。紗希センパイにも資格があったらしいけれど、そこら辺の事情は話してくれない。

「はは。それもそうか」

いつかは話してくれるのだろうか。

でもやっぱり無理かなあ。

「でも、本当に男の子になってしまったのですわね……」

「ん？ そうだなあ」

他のことをぼうつと考えていると、しおりんもぼうつとした表情を浮かべていた。

「何だか、実感してしまいました」

「嫌なところで実感しちゃうんだ……。やっぱり嫌？」

「いいえ、そんなことはありませんわ」

「かつこいい？」

「そ、そんなことはありませんわね」

何だか、頬を微かに染めてぷい、と逸らすしおりん。

「ちえっ」

まったりとした時間が流れている。

歴史を流れる時のように、ゆっくりと、変わらない関係は少しずつ変わり始める。

あたしの行動、彼女の行動、誰かの行動が、ほんのちよっぴりすれ違い始めて、大きな転換の訪れを待ちわびていた。

放課後。

しおりんはいつも通りに、副生徒総長の仕事に出ている。お疲れなことだ。

だから、今日もあたしは、紗希センパイと二人でゆっくりと話し

ている。

「朱音くん、喧嘩したんですか？」

「げっ、何で知ってるんですか」

思わず、げえっとか言ってしまった。

まさか、紗希センパイがもう知ってるなんて。

もしかして、案外広まっている話なのかも。いやだなあ。

「風の噂、です」

「ああ……えっと……まあ」

「喧嘩はよくないですよ」

「はあ。でも、売られた喧嘩だったんで」

いきなり、絡まれたのだ。絡まれたから、倒した。

あたしがやったのは、たったそれだけのことだ。

「停学、させられますよ？」

「大丈夫ですよ。副生徒総長が味方なんで」

「あの子は、優しく見えて厳しいですよ」

「そうですねえ」

確かに、厳しいところもあるが。

基本的に甘々だ。口調と行動が一致していない。

厳しいことを言っておきながら、宿題を見せてくれるような子だ。

甘い。

「はい。ですから、もう喧嘩はやめてくださいね」

「うーっす。紗希センパイが言うなら、もうやめます」

自分から絡みにいくことはないし。

今度絡まれたら、絶対言わないように口止めしておこう。

すると、自分の主張が受け入れられたことに満足したのか、紗希

センパイは口元を微かに緩ませて、こちらに微笑みかけてくる。

「いいこ、です」

今の表情、やばかった。

天使のような顔。

いや、女神以上の顔だ。

首をわずかに傾げて、ふわりとした髪を揺らし、満足感を周囲に振りまいた紗希センパイの笑顔が、あたしの胸の内を可愛さの矢で射ぬく。

思わず、コクってしまいそうになる。

のを、必死に抑えて、言葉を紡ぐ。

「そ、そうだ、紗希センパイ」

「はい？」

「今日、ゲーセン寄ってきませんか？」

「一緒にいるのを見られるのは、ちょっと」

案の定渋った。

でも、あたしは強引に誘いを続ける。

「大丈夫ですって。現地集合って感じで」

「……それなら」

以前も、このやり方なら通用した。

北宮学院の生徒は、いわゆる不良層しかゲーセンに行かない。

真面目っ子の多い学校であり、ゲーセンの中に入ってしまうえば、

二人でいることを、噂のタネにしそうな一般生徒はいない。

不良層の生徒は、あたしを含めて、そんなくだらないことに興味
がなかった。

「決まりー。じゃあ、駅前のゲーセンで」

「はい。でも、あそこは怖いですよ？」

「大丈夫ですよ、ぶん殴ります」

「ぶん殴る……？」

「パンチングマシンをね、パンチングマシンを」

「なるほど……？　でも、あつたっけ……」

「あたし、先に行つて、お金集めてますね」

ゲーセンには、他校の不良や、調子に乗った一般人もいる。

殴られてカネを盗られそうになっている人間を助け、用心棒代として、僅かな資金をいただく。これがあたしのプレイスタイルだった。

「え？」

しかし、これは女の子の青木朱音がやっていたことで。

今のあたしは、遙か西の兵庫県から来たばかりの、異邦人だ。

「あ、い、いや、何でもないです」

「何か、悪いことをしようとしてませんか？」

目を細めて、疑いの視線をあたしに向ける紗希センパイ。

紗希センパイにも、危ないからやめろと言われていたことだが。

目の前で困っている人間がいるのに、無視するようなことはあたしにはできない。

お金だつて、無理にもらったわけじゃないし、相手がくれる、というからもらったただけだ。悪いことは何にもしていない。

「やだなあ、そんなわけじゃないですよ」

「……そうですか？」

「は、はい。じゃあ、先に行つてます」

とにかく、ここに留まりすぎるのはまずい。

何だか、色々とボロを出してしまいそうだし。

鞆を持ち、さっさと出立の準備を進める。

しかし。

「わかりました。すぐに行きます」

紗希センパイも、何か決意じみた表情を浮かべて立ち上がる。

え？ まさか？

「ゆっくりしてもいいですよ」

「いえ、放っておくと、とんでもないことになりそうなので。やっぱり一緒にいきます」

今まで、こんなことは一度もなかった。

「えー」

そうは言いながらも、あたしは嬉しかった。

この部室の外では、会話も交わさないし目を合わせることもない。それなのに今は一緒に、共に、歩いていくことができる。

どういう心境の変化か、紗希センパイは彼女が守ってきた大原則

を、『とんでもないことになりそうだから』という理由で、破った。

「……えー？」

「な、なんでもないです！」

「よろしい」

「ちえー……」

まあいつか。

嬉しいし。

そして、あたしと紗希センパイはゲーセンに到着した。外見からは退廃的な雰囲気は漂っておらず、中も普通のゲーセンと変わらない。

ただ違うのは、一定の時間になると、かつあげチンピラが出現するということだけだ。その時間が近づいている。

もしも、紗希センパイに手を出したらぶっ殺す。割と本気でやる。

「あ、紗希センパイ」

「はい？」

とりあえず、紗希センパイを楽しませてあげよう。

「UFOキャッチャーでもやりませんか？」

「やりましょうー！」

「計画通り」

彼女は、UFOキャッチャーが得意で、ゲーセンで一番好きなゲームだと語っていた。

そうやって気配りして、ちよつとずつポイント上げていかないとね。

「はい？」

「何でもないです。やりましょう早くやりましょうさあやりましょう」

「どうしたんですか？」

「何でもないですよ」

まあ、そんな事実を今のあたしが知るわけではない。

転校していったはずの、青木朱音（女）だけが知ることなのだ。

「……何だか気になります、まあいいでしょう」

「はい。奢りますよ」

「いえ、悪いです」

「いいからいいから」

「あ……」

「頑張つて、取ってください。えーっと、ほら、あの黄色いくまさんのぬいぐるみとかどうですか？」

「あれ、取ろうと思ってました。凄いですね、朱音くん」

「いやあそれほどでも」

趣味嗜好、どんなものが好きで、どんなものが苦手なのか。あたしには彼女の方向性が手に取るようにわかる。だから、どんなことを考えているのかも、ある程度のことならばわかる。だって、好きなんだから。

「じゃあ、頑張ります」

小さくガッツポーズを作り、にっこりとほほ笑む紗希センパイ。

ほわあつとする。ほわあつと。

「頑張ってください」

「はい！」

さて。

紗希センパイは目の色を変えて、全力で、真剣そのものの表情で、UFOキャッチャーに向かった。これからしばらくは、黄色いくまさんのぬいぐるみを獲得するために、全神経を集中させるだろう。

その間は、あたしにフリータイムが出来る。

こっそりと、ばれないようにそろりそろり、と足を動かし。

ゆっくりと、歩き始める。

しっかりと、紗希センパイの動向は監視している。

しているが、それよりもまず、面倒なチンピラの掃除が大切だ。

「さーとと……」

最近、あたしが掃除していたせいで、なかなか安全な場所になつていたし、もしかするともういなくなつてしまい、別の場所にターゲットを求めに行ったのかもしれない。

それなら、それでいい。見つけ次第、そこでも掃除するだけだ。

あたしの人気上がるなら、紗希センパイの耳に入るのなら、どんな危険だつて冒す覚悟はあつた。

「おおつと」

いないかなあ、と辺りを見渡していると。

いた。トイレの入り口の影、多くの場所からは死角になつているところに、金髪のいかにもなヤンキー二人組がおり、にやにやと気弱そうな男の子に話しかけている。

話しかけている、というよりも、脅しかけている。という表現のほうが正しいか。

さて。

とりあえず、振り向いて、紗希センパイがこちらを見ていないか確認。

大丈夫だ。熱心に、黄色いくまさんを取ろうとしている。周囲の様子なんて、知ったことかつて感じに。

これなら、すぐに終わらせればバレないだろう。

よし。

やるか。

そう決心し、あたしはゆっくりと彼らに近づいてゆく。

そして。

「ありがとうございます……」
「ぺこぺこ頭を下げる男の子。」

そして、地面に転がるヤンキー二人。

しゃがみこみ、彼らのポケットから財布を抜き取り、中身を確認。わあ、結構入ってるなあ。

「いやいや、気にしなくていいから。で、いくら取られたんだ」

「一万……」

金持ちめ！

とりあえず、ヤンキー財布から一万円を取り出し、彼に渡す。その一割でもくれたらなあ。くれないかなあ。淡い期待を浮かべるけれども、まあ無理だろう。

「はい、危ないなあと思ったら逃げろよ」

「ありがとうございます！ えっと、お名前は？」

「青木朱音だよ。こっちは転校してきたばっかなんだけどな」

「朱音さま？」

「へ？」

さま？

どうしてさま呼ばわり？

「い、いえ、朱音さまという喧嘩の強い女性がいて……」

「あー、うん。知り合いでもないし、関係者でもない」

「そうですか……」

まさか、そこまで名前が知れ渡っていたとは。狙い通りといえば狙い通りなただけ。

「違う違う」

「そうなんですか」

あ、やばい。

紗希センパイが、もうUFOキャッチャーを終えてこちらを見ている。胸元には黄色いくまさんのぬいぐるみ。そして瞳には、疑いの色を滲ませていた。

「ああ。これからは気を付けるんだぞー」

さっさと別れてしまわないと。

「はい！」

あーあ、収穫なし。

ヤンキー財布から抜き取ってもいいけど、それやってもなあ。

ため息をつきながら、財布をまだ倒れているヤンキーの身体の上

に投げ出し、ちよつぱり残念な気分になりながら、紗希センパイの元へと歩いてゆくのだった。

歩いてゆくのだが。

明らかに、怒っている紗希センパイ。

怖い。真つ赤な瞳が、あたしを射抜いている。

あーあ、バレてる。絶対バレてる。やだなあ。

「朱音くん？」

「ハイ」

「何をしてたんですか？」

「ヒーローごっこです……」

「危ないでしょう」

透き通った水晶の音が、頭に浸透する。

「その通りです」

「……本当に、気を付けてください」

「ハイ」

でも、あたしは嬉しかった。

まだまだ見知らぬ関係だけど、紗希センパイがあたしを心配してくれた。

それって、結構な収穫だと思う。

「もしも、朱音くんが誰かにいじめられたら。心配してるんですよ」

「へ？」

あれ？

何だか、紗希センパイの瞳には涙が浮かんでいる。

どうして、あたしがいじめられるなんて、ファンタジックなことを言い出すのだろうか。

「ああいう人を攻撃して、目をつけられたらどうするんですか。転校とか、しないといけなくなるんですよ」

「大丈夫ですつてば。俺、やり返せますし」

「そうは言いますけど……」

何だか、まだまだ言いたそうだ。

しかし、今はそんな話がしたいわけじゃない。
さつと話題を切り替え、さつと紗希センパイの手を取り、
「ほら、紗希センパイ。次のゲームやりましょうよ。そんな面白くない話は、やめておきましょう」
さつさと歩きだす。
せつかくの機会なんだから、遊ばないとね！
お金はないけど、ちょっとくらいはあるし！ なんとかなるさ！

時間が経ち、夕陽はもう水平線の向こうに消え、外はもう薄暗くなっている。

「そろそろ帰りましょうか、紗希センパイ」
このまま紗希センパイを一人で帰すわけにもいかないし、彼女を家に送ってあげなければ。そう思うのだけれど、紗希センパイは自分の家の場所を、あたしに教えてくれるだろうか。

「はい。帰りましょう」
「送っていきますよ」
「あ……えっと……」

まあ、予想通り。
彼女はばつが悪そうに、辺りをきよろきよろと見渡している。

「どうしたんですか？」
「送ってもらうのは悪いので……」
他人に干渉したがるらない。させたがらない。
そんな紗希センパイだから、きつとそう言うと思っていた。
「気にしないでください。危ないでしょう、もう夜も遅いし」
「えっと」

「嫌ならいいんですけどね、嫌なら、悪いですし」
しかし、頑固ではあるが、突破口はある。

申し訳ないという気持ちもあるが、彼女の罪悪感を利用するのだ。
「そんなことはないです。お気持ちはありがたいのですけれど……」
「じゃあ行きましょう」

「強引ですね、朱音くん」

「よく言われます」

予想通り。

こうすれば、紗希センパイの心にゆっくりと近づいてゆける。

そして、あたし達二人は、ゆっくりと帰路につく。紗希センパイ、黒崎家の家は街の外れにある大豪邸だ。数回かお邪魔したことはあるが、とても窮屈で、とても重苦しい雰囲気漂っていた。

歩いていると、紗希センパイがあたしの横顔を見つめながら、語りかけてきた。

「ほんとに、そっくりです」

「その……転校していったって人に、ですか？」

「はい。よく喧嘩してて、それこそ、不良さんたちと戦ってました」

「はは……」

自分のことだもんなあ。

何だかむずむずするなあ。

「でも、格好良かったですよ。髪も染めていて、周りの人たちには不良女だとか、言われてましたけど、わたしは好きでした」

「へえー」

不良女！

あたし自身は、おしとやかなレディーのつもりだったのに！

ありえませんか、としおりんが突っ込む声がどこかで聞こえた気がする。気がするけれど、あくまで気のせいだ。

てか、染めてないよ！ 地毛だよ紗希センパイ！

「そっか、染めてないよ、朱音くんは、汐里の彼氏さんなんですか？」

「ぶっ！」

「あ、凶星でしたか」

「違います違います。えっと、友達です。友達。親友」

「朱音くんは、どちらの出身でしたか」

「えーっと、生まれはこっちなんですけど、育ちは兵庫です」

「それは遠いところから」

「ええ……まあ」

何だか、バレてるような気がする。

いや、バレてたら怒ってるか。バレてないよなあ。

「どうして、汐里と仲良く？」

「う、うーん……チャットです、チャット」

「なるほど。チャットなんですか。イマドキですね」

「はい、そうですそうです」

「なら、知ってるかもしれませんね」

夜の闇の中、紗希センパイはゆっくりと口を開く。一体、何を語るつもりなのだろう。

「何がです？」

「汐里、副生徒総長なんですよ」

「ああ、はい。聞きました」

とつくの昔に知っている情報だった。

「副生徒総長って、選挙で選ばれないって知ってましたか」
「こちらも、昔から知っている。」

でも『黒崎の人間が、副生徒総長となる』以外は、一般生徒が理由を知ることはない。聞こうと思ったこともなかったし。

「それも……聞きました。でも、理由がよくわからなくて」

「黒崎の人間が、本家筋分家筋関係なく、副生徒総長に就任するんです。それで、将来の経営の勉強をさせるんですよ。生徒総会の権力が強い理由は、そこなんです」

「ああ……なるほど」

そんなカラクリだったのか。

うちの学校は、本当に生徒総会の力が強い。その理由は、経営勉強のためか。

黒崎家は分家が日本中にあって数が多いらしいし、次から次へと子供が生まれるから、副生徒総長の欠員が出ることもないんだろう。

「久しぶりの本家筋の副生徒総長、それが汐里です」

「大変ですよねえ」

分家に負けられない、それが本家としての意地だろう。しおりんのことだし。

「ええ。プレッシャーでしょうね。もしも、上手に運営できなければ、黒崎の当主に選ばれませんから」

でも、だ。

本家筋の人間は、しおりん以外にもいる。

「でも、それなら紗希センパイにも資格があつたんじゃ？」

そう、紗希センパイも本家の人間であり、しかも長女だ。資格ならば、紗希センパイのほうにあるのではないか。

しかし。

「わたしは、お爺様達……偉い人たちに、『白子は不要だ』と言われませんでした」

全てを諦めきつた笑みを浮かべ、紗希センパイは語った。

白子、アルビノというだけで、存在が否定される。

「そんな……」

あんまりだ。

そんなの、どうかしてる。

「わたしは、あの子に迷惑をかけたくない。ただ、学校の運営だけに全力を使わせてあげたい。ただ、それが出来れば満足なんですよ」

「そんなのってあんまりじゃないですか。紗希センパイが悪いとか、そもそも、外見がどうかなんて、運営するのに何の関係もないじゃないですか」

思わず熱っぽく演説をふるうも。

「でも、それがルールですから」

たった一言で、切り捨てられてしまった。

「……あんまりですよ」

この問題が、姉妹の仲をややこしいものとしている。

その事実を、知ることができた。

あたしは、この思わぬ収穫に、何だか得体のしれない期待感と。

「優しいんですね、朱音くんは。すみません、何だか面白くない話

をしてしまいました。さあ、帰りましょう」
「どうしようもない、絶望の壁のようなものを感じるのだった。」

第三話 『もしかして、一緒だったの?』

リビングで、ゆったりと朝の時間を過ごす。

一日元気に頑張るためには、朝はしっかりとしておかないとね。

「そういえば、母さん」

「どうしたの?」

テーブルで、あたしは母さんと一緒に食事をとる。パジャマはもう男物だし、化粧もやめた。髪の毛はぱつと整えるだけで、朝の余裕がかなり生まれた。楽だなあ。

そんなことを思いながら、母さんに話しかける。

「その、性転換? の申請って終わったの?」

「終わったわよ」

「じゃあ、あたしってもう男の子?」

「そうなるわね」

「そうなんだ……」

何だか、改まって考えてみると凄い話だなあ。

「まあ、頑張りなさい」

「あっさり言うなあ。あれ、父さんは?」

「有給使ったから、溜まった仕事を片付けるってもう出ていったわ」

「そうなんだ」

父さんはそれなりに忙しい会社員だ。

「そういえば、母さん」

「ん?」

父さんの名前が出たので、ちょっと聞いてみよう。

今まで、勇気がなくて聞けなかったことだ。この機会だから、聞いてみよう。

「父さんとは、その、どうして付き合ったの?」

「どうしてそんなことを聞くの?」

どうして聞いてしまったのか。

その意図は自分でもわからなかった。

「いや、その……えっと……」

でも、気になってしまったのだ。

「女の子が好きだったのに、どうして男と付き合ったのか、って？」

「……うん」

母さんも、あたしと同じで女の子が好きだった、らしい。

だから、カミングアウトする勇氣も出たし、だから母さんは、あたしが紗希センパイとくつつけるように、応援もしてくれていた。

でも、どうしてだろうか。父さんと付き合い、そしてあたしが生まれた。

何だか、矛盾なようなものを覚える。父さんが中性的な顔つきだから、妥協して結婚したとか、そういうものなんだろうか。

「気になる？」

「気になる」

「教えてあげない」

「えー！」

ペろ、と舌を出して悪戯っぽく笑う母さんに、思わず拍子抜けしてしまった。

「いつか、教えてあげるわ」

「むっ……」

ほんのちよっぴりの勇氣を出して損した。勇氣損。

テンション降下気味のあたしに、母さんは微笑みかけ。

「でもね、朱音。一つだけ覚えておきなさい」

ゆっくりと、口を開いた。

「人を好きになることに、権利なんて必要ないの。好きになる権利がないとか、好きになっちゃだめだとか、そんなことは考えちゃだめだからね」

「……どういふこと？」

母さんの言葉は、深く、意味が大きそうなもので。

自分に言い聞かせるような、そんな自戒の念を込めたような言葉だった。

「思いは伝えるもの。心の中で押し殺すものじゃないわ」

「母さんも、伝えたの？」

「ええ。伝えたわ」

伝えた。

「そしたら、どうなったの？」

「さあ、どうなったんでしょうね」

でも、結果は目に見えている。

断られてしまったのだらう。想い人である少女に告白し、断られた。

「……」

それを深く掘り下げる勇氣は、あたしにはなかった。

それを望んでもいないだらう。

「後悔はしてないわ。信じてたから」

どこか、吹っ切れたような笑みを浮かべながら、母さんは語る。

やりきった人間の顔。想いを伝えきった人間の顔。

失敗したのに、朗らかな笑みを浮かべ、過去に思いを馳せている。

「そう、なんだ」

「ほら、早く食べちゃいなさい。早く洗い物したいのよ」

「……うん」

あたしも、伝えておくべきだったなあ。

あれだけ差が縮まっていたのだから、女の子であるときに、紗希

センパイに告白しておくべきだったなあ。

これから取り返していかないと。あたしにはまだまだチャンスがある。

がんばらう。

そして、あたしは迎えに来たしおりんと二人で、歩いて学校へと向かう。彼女は普段車で通学していない。出来る限り、他の生徒と

同じ環境で育てるとというのが、黒崎家の方針らしい。

「あー、女の子になりたい」

思わず、あたしは隣のしおりんに愚痴をこぼす。

「はいはい」

「だってさあ、しおりん。聞いてよ」

「女言葉」

即座に、しおりんから修正が入る。

「聞いてくれよ」

「はい」

「紗希センパイと、あと少しで付き合えてたかもしれないんだし」

「隣の芝は青いですわね」

「うっ……そうだけど」

厳しい指摘だなあ。

もうちよつと、オブラートに包んでくれてもよかつたのに。

「そんなことを考えている間に、まず環境に慣れてくださいませ」

「慣れないんだよなあ」

女の子社会でいるときは、また違った環境がある。男の子社会

は、女の子社会よりも単純で、頭を楽にさせてられるけど、まだまだ

だわからないことも多いし。

「とは言いながらも、クラスの中心になっただじゃないですか」

「まあ、そうだけど。山岡いるし」

あのバカ、山岡。

結局、あいつはあたしが転校前と、何一つ変わらない状態に戻っ

た。つまりは悪友ポジションだ。

「その適応力が、朱音くんの強みですわ。これから、紗希ねえとも

仲良くなっただけですわよ。昨日、ゲーセンに行ったのでしょう？」

「うん。行っただけね」

「わたくしが、副生徒総長の仕事をこなしている間に」

「ご、ごめん」

痛いところを突かれてしまった。その通りだもんなあ。

「お気になさらず。そういうこともありますわ」

「あはは……」

「紗希ねえは、笑っていましたか」

あたしの顔を覗き込み、しおりんは尋ねる。

「うーん、まだ固いなあ」

「そうですの」

「そりゃ、そんな簡単に心を開いてなんて、くれないって」

むしろ、簡単に心を開かれたら。

あたしの、女の子としての数年は何だったんだ、という話になるし。

「まだ一週間経っていませんわ」

「だよなあ」

「これから、ゆっくりと前に進めばよいのです」

「そうだなあ。でも思うんだけどさ、しおりん」

「はい？」

「また、近づきすぎたら女の子に戻るんじゃないかって。そうなら、今まで積み重ねてきたものは全部なくなるだろ？」

そういう不安が心の中にある。

あたしは、ある日突然男の子になった。

ということは、逆が起こったって、何の不思議もないのだから。

「どうして、そう思うのです？」

「何だか、そんな気がするんだよな。不安になるんだ」

「よくわからない仮説ですが。仮に、紗希ねえに近づきすぎたら、

女の子に戻ってしまうとしましょう」

「うん」

「それでも、あなたが男の子であったときに積み重ねたものは、あなたの中に残ります。女の子に戻ったときには、昔に積み上げてきたものが、あなたの中で輝きますよ」

きらりと輝く笑みを浮かべたしおりんの顔は、苦しむ者を諭す神の光のごとく、燦然とあたしを照らしていた。のだが。

「うー？」

難しい。

何となく、意味はわかるのだけれど。

ああ、しおりん、ため息をつかないで。悲しいから。

「はあ。どっちにしろ、いい経験だったじゃないか。ということですわ」

「そうなのかなあ」

「戻ったら戻ったときに、考えればよいのですわ。今は、目先のことだけを考えて、集中して生きてゆけばよいのです」

そして、しおりんは笑った。

そうだなあ。その通りだ。今のあたしは、今だけを考えて生きればいい。

「そうだね、わかった」

「わかればよろしい」

前を向いて進む。

それだけでいい。

と、そんなことを考えていると。

「う……ん？」

通学路の先、大きなビルのふもと。小さくしか見えないのだけれども。

数人の男子に、一人の女子が囲まれ、路地に入っていこうとしていた。

「どうしましたの？」

あたしは目がいい。視力検査は万年最高の結果に終わる。

最近は男の子とも連れ合って悪いことをする子も多いし、平和そうであれば、干渉するつもりはなかった。そんなの、知ったこつちやない。勝手にやればいい。

「……！」

でも。

目をこらして、その姿を見つけた瞬間。

あたしの足は、まるで爆発するかのよう加速を始めようとしていた。

「あつ、朱音くん！」

「しおりん、離して」

制服の襟を、しおりんはぎゅっと掴む。

どうして止めるのか。どうして行かせてくれないのか。

しおりんの力は弱いながらも、強い意志で握られていた。

絶対に行かせない。絶対に干渉させない。そんな思いが伝わってきた。

「だめです、手を出しちゃ」

「理由は、後で聞くから」

でも、そんなことは知るか。

あたしは、あたしのやりたいようにやる。

しおりんにだって、干渉させはしない。絶対に。

「あつ……」

だから、彼女の制止を軽く振り切り。

そして、駆け出してゆく。

紗希センパイの元へと。

人もおらず、薄暗い路地。

必死に走り、追い付いた先には、あからさまなチンピラたちと、薄暗い中でも、微かな光を受けて透き通る、可憐な少女の後ろ姿。

『外で会っても、出来る限り話しかけるな』。

そんなルールが、あたしと紗希センパイの間にはあった。

でも、このときだけは別だ。誰が何と言おうと、救い続けてきた。

「……っ！」

このクソ野郎ども、紗希センパイを連れて何をするつもりだ。

あたしの頭は、血が沸騰して崩壊してしまいそうなほど、怒りに燃えていた。

「おい」

だから、あたしは彼らに怒りを投げつける。

すると、不機嫌そうに眼を細めて、彼らはこちらに振り返る。紗希センパイも同じで、諦めきった瞳を潤ませて、それでも、どうして、と疑問の色を漂わせていた。

「その人連れて、何をしようってんだよ」

「あ？ 関係ねえだろ、てめえには」

図太い声で、チンピラの一人が語る。

ああ、見覚えがある。以前も、ボコボコにしてやった奴だ。

あたしが転校していったからって、自由にのびのびと暴力活動に勤しんでるのか。

「早く答えるよ。俺は、そんなに気が長くねえんだよ」

「知らねえよ。俺らは、頼まれてやってるだけだ」

「誰にだよ」

誰だ。

こいつらを操り、紗希センパイを虐げようとするのは誰だ。

「んなもん、関係ねえだろ」

「後で、ゆっくり聞いてやるよ」

北学の人間か。

それはわからない。

でも、わかつたら、ぶっ殺してやる。

それくらい、あたしの頭の中は煮えたぐり、溢れ続ける怒りは、全く留まる事を知らなかった。

「へっ、聞けるもんならな」

「……紗希センパイ、こっちに」

とりあえず、早く紗希センパイを回収しないと。

敵側にいられちゃ、こっちの攻撃も自由にできない。

「朱音くん……どうして……」

「何だよ、この白いやつの友達か何かだよ」

白いやつ。

くそ、何かすげえムカついた。

好きな人のことをバカにされるのって、やっぱり本当に腹が立つ。

「名乗る価値もねえよ。……センパイ、早く」

「……」

「おい、こいつ北学に転校してきたっていう……」

「あ？」

「ヤベエ奴らしいぞ。すげえヤベエって話を聞いた」

そんな噂が流れてるのかあ。

と思いきや。

「関係ないだろ。女みてーな顔してるじゃねえか」

「だな。まあ、一本くらい折ってやりや、自分の立場わかんたる」

「そうだな」

まあ、弱く見られているのならいい。

その分だけ、相手を圧倒しやすくなる。

それくらいに考えていて、全くデメリットに思わなかったのだけ
れども。

「……前、女の子に負けたたじゃないですか」

紗希センパイが、何を思ったのか。

小声で、チンピラたちに対して本当に弱い抵抗を試みていた。

「てめえっ！」

「……事実です」

どうして、そんなことを今言うのか。

どうして、紗希センパイは今、チンピラに狙われるようなことを
言うのか。

「お前、黙ってりや調子乗りやがって」

案の定、チンピラの一人は怒り。

腕を振り上げ。

攻撃を、紗希センパイへ降ろそうとしていた。

「紗希センパイ、何でそんな余計なことを……!!」
大変だ。

彼女の身体にキズをつけるなんて、そんなこと誰であつても許さ

れない。

とりあえず、ミッションスタートだ。紗希センパイを守りながら、チンピラ全員をぶつ殺す。簡単なことだ。紗希センパイが、余計なことさえしなければ。

「仕方ねえっ……！」

そして、あたしは走り出す。

そして、敵を殲滅しようとする。

紗希センパイの、赤い瞳に怯えの色が滲む。

ああ、暴力的なところなんて、出来れば見せたくなかったのだけれども。

そんなことは、今は関係ない。そんなこと、気にしていられない。ただ、目の前の敵を倒し、情報を聞きだし、少しでも紗希センパイを取り巻く状況を改善させられたら。

頭に浮かんでいたのは、単純な思考だけだった。

ミッション、コンプリート。

あたしの足元には、チンピラたちの肢体。もとい、死体。半死体。いとも容易く、彼らを制圧することができた。

多分、山岡よりも弱かったんじゃないだろうか。余裕すぎたし。

「おい」

しゃがみこんで、地面に転がるチンピラの一人の顎を持ち上げ、尋ねる。

多分、こいつが一番強かったし、ボス格だ。完全に気絶はせずに、意識はあるし。ぼんやりとしてるけど。

「誰に、何をやれって言われた」

「……北学の、女子だよ」

「何をやれって言われたのか、早く言えよ」

「ホテルに連れ込んで、やって写メ撮って送れって言われたんだよ」
理解できない。

意味がわからない。

ただのいじめにしては、あまりにも過酷じゃないか。

「……」

「えげつねえわ、マジ女つてこえーよな」

「お前ら、前からやってたのか」

「ちげえよ。今回だけだ」

今回だけ。

本当かどうかはわからないが、目が真実味を帯びている。信じてやろう。

さて、本題だ。

「その女子つーのは、誰なんだよ」

「高二の連中だよ」

「だから、誰なんだよ」

「さあ？ オレはボス猿に頼まれたただだ。まあ、女子全員じゃねえの。そいつ、嫌われてるみたいだしな」

紗希センパイが嫌われている。

そんなことは、知っていた事実だ。

でも、嫌われてるからといって、何をしてもいいわけじゃない。

人の大切な身体をもてあそぶような、そんな悪質で陰湿なイタズラを許していいわけじゃない。

「……朱音くん、もういいですから」

でも、紗希センパイは制止する。

どうしてなんだ。

「よくねえっすよー！」

「もういいって、言ってるのです。わたしが言ってるのですから、もういいでしょう」

「……紗希センパイ、」

「行きましょう。先に行ってますね」

でも、何も言えない。

ゆっくりと、背中を向けて歩き始める彼女を見つめ。

「……っ！」

あたしは、追いかけることができなかった。
どうしてだろうか。足が動かなかったのだ。

「おい」

「あ？」

「お前、名前は何て言うんだよ」

むくりと身体を起こしたチンピラが、あたしを見つめながら尋ねる。

「青木朱音だ」

「……青木？」

「転校したやつとは、関係ない」

どうせ、そっちと一緒にいるのだろう。

まあ、実際はあたしなのだけれども。あたしなのだけれど、今のあたしはあたしじゃない。ややこしいな。

「ああ、そうか。おい、青木」

「何だ」

「オレたちはお前に負けた。オレはもう、そのセンパイさんには手を出さねえ」

「当然だろ」

もしも、また手を出したら。

次は、半殺しじゃすまない。ぶっ殺す。

「だから、オレたちのボスになってくれよ。お前、強いし」

「はあ？」

何を言うのだろうかと思っていたが、バカバカしい話だ。

オレたちのボス？ それって、チンピラのボスになれってことだよね。

「もしも、センパイさんがいじめられてるのを見たり、聞いたりしたら、オレたちが助ける。その代わり、お前もオレたちを助けてくれ」

「お前たちに、何のメリットがあるんだよ」

メリットがわからない。

実質的には、紗希センパイの用心棒じゃないか。

「強いやつと、一緒にいたいだけだ。あとは、他のチンピラと戦う時に、助けてくれればそれだけでいい」

「……」

「お前は、北学の中でセンパイさんを助けりゃいいだろ。オレたちは、北学の外でセンパイさんを助けてやるよ。オレたちの仲間は何百人といる。悪い話じゃないだろ」

何百人？

何百人もいるチンピラの、ボスになれって？

ちよいとそれは、リスクが大きすぎるんじゃないか。躊躇するなあ。

「それは……」

「青木、もう一つ、教えてやる」

戸惑っている、

「センパイさんは、北学女子のいいオモチヤだ。このままだと、何されるかわかったもんじゃねえぞ。今回のが成功したら、それ脅しのタネにして、もっとやらせるつもりだったらしいからな」

チンピラが、再び言葉を紡ぎ始める。

「……どういうことだよ」

「あいつら遊ぶのに飽きたから、やらせようとしてんだよ。オッサン相手にな、金取って」

「んなもん、絶対に許さねえぞ」

どうかしてる。頭がおかしい。

「どこからどうすれば、そんな発想が出てくるのか。恐ろしすぎる。オレらだって、ドン引きだよ。さすがにねえだろ。それにな、青木」

「何だよ」

「あの女子連中、相当に頭おかしいわ。オレらが言うのもなんだけどな。容赦しねえよ、特にセンパイさん相手には、相当にひでえことをやってる」

「そんなこと、一度も」

一度も、紗希センパイの口から語られたことはない。いじめ現場を、救済したことは何度もある。それでも、いじめの内容を知ることにはなかった。一度も、何をされて、何があったのかを知ることにはなかった。

「そりゃそうだろ。後輩に迷惑かけたくねえんだろうな」

「……紗希センパイ」

「青木。男と男の約束だ。絶対に破りはしねえ。どうだ」

「わかった。これから、よろしく頼むよ」

そこまで言われたら、あたしも信じざるをえない。

男と男の間の約束は、鉄のように固いと聞いている。

握り拳を、がちつと合わせ。

そうすることで、契約が成立した。

「任せるよ。もう、指一本触れさせやしねえ。メルアド交換しようぜ」

「ああ」

「そうだ、もう一ついいことを教えてやるよ、青木」

「んあ？」

「センパイさんはまだ、誰ともやってねーし、やらされてねーよ。

安心しろ。まあ、自分から男作ってやってるなら、まあ別だけどな」

何を言われるのか。

ぼうつとしていたが、一気に頭がしゃきつとした。

そして同時に、何だか安心してしまっ自分がそこにいて、何だか恥ずかしい気分になってしまった。まさか下ネタを、こんな所で使ってくるとは。

でも、有用な情報……なのかな？ わかんないけど。

「ば、知るかよ、んなこと！」

「好きなんだろ、お前。すぐにでもわかる。任せるよ、守ってやるから」

「くそが……」

「ハハッ！」

男の笑いが、路地裏を支配した。これで、紗希センパイの外の安全は確保されたも同然だろう。これで、北学の人間は、いじめの手先としてこいつらを使えなくなったのだし。

じゃあ、後は。

あたしが、北学の中で彼女を守るだけだ。

その様子を、しおりんは黙って遠くから見つめていた。

何かを言いたそうにしているが、何も言うことはなく。

あたしは、紗希センパイがどこかへと去ったのち、しおりんと二人で学校に向かい、無言の時間を過ごして、無言の昼食を終えた。時間はいつもより遅く流れながら、過ぎていった。

そして、放課後。

夕陽が差し込む英語研究会の部室で、あたしは紗希センパイと二人。

何も話すことなく、何もすることなく、ただただじいっと、テール越しに向かい合っていた。

何を話していいのかわからない。

何をすればいいのかわからない。

ただ、意思だけは伝えておこうと思った。

「紗希センパイ」

「はい」

「俺、紗希センパイを守ります」

だから、意思表示をする。

「朱音くん」

のだが。

「……はい」

「本当に、ありがとう」

「じゃあ……」

「でも、結構です」

弱々しい笑みを浮かべた紗希センパイは、あたしの申し出をきっぱりと拒絶した。

「朱音くん。見られてしまったから、お話、しておこうと思います」
「……」

今から話されることは、きっとあたしがもう知っていることだ。もう数年前から知っていて、何とかしようとして動き続けたことに関係することだ。

「皆さんは、わたしが嫌いみたいです。ですから、この学校じゃわたしは限りなく浮いた存在なんです」

「そんなこと……」

至高の容姿を持ち、決して抵抗しない弱さを持つ紗希センパイ。いじめのターゲットとしては、最適だ。

何をされても誰にも言わない。誰にも助けを求めず、ただじいと耐え続ける。

そんな彼女は、不満のはけ口になっていた。

「いいんですよ、朱音くん。本当のことを、助けてくれたあなたには知って欲しいんです」

「……」

でも、このままでいいのか。

よくないだろう。

「わたしは昔、わたしを助けてくれた人が、追い込まれていくのを見ました」

「え？」

紗希センパイに、手を差し伸べた人が、あたし以外にもいた。

誰なんだろう。孤立していた彼女を救ったのは、あたしだと自認していたのに。

「その人は、わたしのせいで、ここにはいられなくなってしまいました」

「いつ、いられなくなっただんですか」

「昔の話ですよ。ちよっぴり、昔の話です。……最後には、怒った

のでしょうか。何も言わずに、目の前から去って行きました」
薄情な人間だなあ。

去って行く前には、何があっても別れは告げるべきだ。

そうしなかったから、紗希センパイはこんなに傷ついているのに。

「事情があつたんだと思います。俺にはわかりませんが」

まあ、助けていたのなら一応擁護してやるが。

「それでも、それなら一言くらいは残してくれるでしょう。よつぽど、ショックだつたんだと思います」

悲しい色を帯びた瞳に、僅かな水分を満たして、紗希センパイは語る。

ああ、よつぽどショックだつたんだろうなあ、紗希センパイ。

「わかつてくれましたか。わたしはもう、あんな辛い思いはしたくないんです」

「でも、辛い思いをしてるのは、紗希センパイじゃないですか」

「自分のことなら、耐えられます。大切な人が辛い思いをするのは耐えられないんです。それに、朱音くんは汐里の彼氏さんでしょう？」

突然の言葉に、思わず吹き出してしまった。

あたしがしおりんの彼氏？ そんなこと。

「ち、違いますって！ 友達です、ともだち！」

「ふふ。隠さなくてもいいんですよ。汐里から、最近よく話を聞くようになりました」

「違いますってば！」

だめだ。これは紗希センパイの論点すり替えテクニクだ。

まさか、出会ったばかりのあたしに使うとは思わなかったが。

都合が悪くなると、黒崎姉妹はこうやってあたしを動揺させて、話題をすり替える。

「……じゃあ、紗希センパイにも好きな人っているんですか」

じゃあ、こつちもすり替えてやる。

どうせ、元の話題には戻れないのだ。

それなら、聞きたいことを聞いてやる。

いじめから助けるのに、紗希センパイの許可なんて不要だし。勝手に助ければいいし。

「はい、いました」

はぐらかされるかなあ、と思ったら。

「えっ、誰ですか」

まさかの返答に、あたしは思わず身を乗り出して尋ねる。

紗希センパイの好きな人。誰なんだろう。というか誰だ。探し出してやる。

「ひみつ、です」

「もしかして、俺ですか？」

どきどきする胸の鼓動を無視しながら、あたしは尋ねてみるも。

「後輩としては、好きですよ」

「ですよー……」

あまりにも早い、瞬間の即答。

「？ どうして、そんなに落ち込むのですか？」

「いえいえ、何でもありません」

まあ、出会ったばかりだし。

好きになっってくれるとは思ってなかったけど、やっぱりなんだかシヨック。

「そういえば、何となくなんですけれど」

「はい」

「汐里も、朱音くんも。何か、わたしに隠していませんか？」

「え？」

鋭い、紗希センパイの指摘。

隠し事ならある。

あたしは、女の子の青木朱音だ。

言うことで、精神的なシヨックを与えるかもしれなくて言えず、ここまで来ているが。

「付き合ってるのかなあ、とぴんときたのはそこなんです」

「どういことですか？」

「何だか、秘密を共有する二人、ろまんちつくじゃないですか？」
その通りだ。

二人だけの秘密。あたしとしおりんはそれを共有している。

正確には、父さんと母さんも知っているけれど、その他の人は何も知らない。あたしたちだけの秘密だ。ロマンチックかどうかは別として。

「えーあーえー……」

「どうです？ なかなか、カンが鋭いって言われるんですよ」

「確かに、凄く鋭いです」

「でしょう」

自信満々の、紗希センパイの笑み。

太陽のように明るく、柔らかく、温かかった。

あたしはこの笑みに惹かれたのだ。連日のケンカ、戦いの中で荒んでいた心を癒してくれた、この笑みに。

「でも、ハズレですよ。あたしとしおりんは、付き合ってますん
カンは鋭いが。」

さすがに、あたしが元女の子という発想は、浮かばなかったよう
だ。

「なんだ。そうなんですか」

「はい。残念でしたね」

話すことで、嫌われてしまうかもしれない。

話すことで、騙っていたのかと怒られるかもしれない。

そんな恐怖が、あたしの頭の中を支配していた。ややこしい思い
だ。本当に。

そして、紗希センパイといつも通りに部室で別れ、帰宅後。

「ただいまー。あれ？」

ドアノブを回して、リビングに至るドアを開いた瞬間。
見慣れない人間が、テーブルに座っているのが見えた。

しおりんだ。

「どうしたんだよ、しおりん」

「少し、お話があります」

「あれ、母さんは？」

辺りを見渡すが、いるはずの母さんがいない。

不用心だなあ。

「少し、席を外してもらっています」

「ああ、そうなんだ」

「朱音くん。今日のことは、少し問題ですわ」

「何が？」

何が、と言うものの心当たりはあった。

どうせ、紗希センパイとか、そこらへんの話だ。

「あのチンピラ、ここらを仕切ってるヤンキーのボスです」

心配そうに、あたしを見つけるしおりん。

そこまで心配することはない。何ということはないし。

くすりと笑って、あたしはしおりんの向かい側に座る。

「へえ、そうなんだ。じゃあ、俺が今度からボスだな」

「そんな気楽な話じゃありませんわ。朱音くん、悪い事は言いません。

ん。もう、あの連中に関わるのは、どうかやめてください」

あたしは軽い気持ちだったのだけれど。

しおりんの顔は、笑っていない。本気で言っている目だ。

「危ないから、とか言うんだろ」

「そうです。危ないです」

「大丈夫だって。何とかなるから」

今まで、危ない橋なんていくらでも渡った。

今更、チンピラのボスになるくらい、何てことはない。

それに、ボスになれば、学外での紗希センパイの安全が確保できるし。

「ならなかったときは、どうするんですの」

「その時はその時だろ」

「そんな話じゃありません」

「どうして、しおりんがそんなに心配するんだよ」

「そ、それは……」

明らかに狼狽するしおりん。

どうしてそこまで狼狽えるのか、わからなかったけれども、きつとあたしに反論されてしまつて、必死に言い返す理由でも考えているんだろう。

「俺は男の子になつたんだから。そんなに心配してもらわなくてもいいって」

さすがに過保護だ。

「でも……」

「心配してくれるのはありがたいけど、俺は大丈夫だから」

「でも、もしも、危ないことに巻き込まれたら……」

「その時は、しおりんが助けしてくれるんだろ」
「するど。」

「え？」

しおりんは、目を丸くして、こちらを見つめる。

「言つてただろ、男の子になつた日に。面倒なことは処理してやるつて」

「……そう、でしたわね。それでも、助けるとは言つてませんわ」

「しおりんなら助けしてくれるつて、信じてる」

助けるとは、確かに一言も言っていない。

でも、しおりんなら、そうしてくれると思つた。

根拠は全くないけれど、助けしてくれると思つた。だから、男の子になつたあのととき、電話したんだし。

「どうして、そう言い切れるんですの？」

「しおりんは、ずっと助けてきてくれたし」

「たつた、それだけですの？」

「それだけで、十分だろ」

「……本当に、あなたって残酷です」

「へ？」

「残酷な人ですわ、あなたは」

「どういう意味？」

わけがわからない。

あたしのどこが残酷なのだろう。

助けを求めすぎるから、残酷なんだろうか？

わからないなあ。

「それがわからないから、残酷なんですよ。……そうすわね、面倒なことは処理してや

るって、言ってしまったのですわね」

「うん。優しいもん、しおりん」

厳しいところもあるけれど、本当は優しい女の子。

それが、しおりんだ。それがしおりんの、本当の姿だ。

「でも、一つだけ約束してください」

そんな彼女が、あたしを見つめて、真剣な表情を浮かべて。

何か、言おうとしている。

「うん？」

「絶対に、危ないことはしないように。どうしても、危ないことをするときは、少しでもわたくしに相談してください。それだけ、守ってくださいまし」

本気で心配してくれている。

そんな目だ。

「わかった。出来る限り、そうする」

「出来る限りじゃなくて、絶対ですわ」

「絶対、そうする」

何度も確認をされ、思わず苦笑してしまった。

でも、これがあたしを大切に思ってくれている証だ。

「はい。お願いします」

「それで、話ってそれだけ？」

しかし、何だか拍子抜けだ。

「そうですけれども」

「紗希センパイの話をしにきたんじゃないの？」

何だか深刻な雰囲気を漂わせていたから、きつと紗希センパイに
関係することだと思ったのに、

「違いますわ」

「へえ……」

即答されてしまった。

うーん。

「どうして、わたくしがここで紗希ねえの話をすると？」

「自分の姉が、いじめられてる現場、初めて見ただろ」

説明しづらけれども、率直に話す。
すると。

「いいえ」

彼女は、真顔のまま、首を横に振った。

あたしは、首を縦に振ると思っていた。

でも、彼女はそうしなかった。

「へ？」

どうしてなんだ。

どういうことなんだ。

「初めてじゃありませんわ」

「どういふことだよ」

問い返すと。

「見過ごしたのも、放置したのも、初めてじゃありませんわ」
しれっと、しおりんは言い放った。

いじめを、見過ごしたのも。

いじめを、放置したのも。

初めてじゃない。

「自分のお姉さんだろ、なんで放置するんだよ」

いじめがあるということは、知っている。

それでも、実際に現場に遭遇すれば、何かアクションを起こすはずだろう。それでも、彼女は今まで、何も起こさなかったのだ。今まで、現場に遭遇しても、スルーし続けてきたのか。

「それを、紗希ねえ自身が望むからです」

「意味がわかんねえ。んなもん、本当かどうかわかんねえだろ」
残酷すぎる。

あまりにも、悲しすぎる。

しかし、しおりんは。

「わかります。わたくしは、シスコンですから」

ただ、その一言で話を完結させてしまった。

何だろう。

「それでも助けるだろ、普通は」

割り切れない。

あたしは、そんな現実には認めたくない。

しかし。

「朱音くん」

「何だよ」

しおりんの諭すような声に、いらいらしながら返事を返すと。

「紗希ねえは、手を差し伸べられることを望んでいませんわ」

「そんなこと、しおりんが決めることじゃない」

「黒崎家の内情に一番詳しいのは、わたくしですわ。あなたじゃない。あなたは、黒崎の人間ではない」

心ならずしりと、重くのしかかる言葉が投げつけられた。

そうだ。あたしは、黒崎家の内部なんて、何も知らない。

あたしはただの女の子だった男の子で、紗希センパイの家族でもない。

「……………」

「紗希ねえは、副生徒総長になれる器でした。わたくしなんかよりも、優秀で知的で、頭の回転も速い。氷のように冷徹な判断を下す

かと思えば、温かみのある施しもできる。そんな方です。でも」「でも?」

「お爺様たち。黒崎家の偉い人々は、紗希ねえを拒絶したんです」
そう語るしおりんは悔しそうに、それでも懸命に感情を堪えているように見えた。

以前、紗希センパイから聞いたことはある。聞いたことはあるが、何度聞いても胸糞が悪いものがある。

「……アルビノ、だから?」

「そうですね。その瞬間、わたくしが副生徒総長になり、黒崎家主の座を分家と争うことが決定したのです」

何が悪いのか。

見かけが、ちょっと人と違うだけだ。

それなのに、どうして黒崎家は紗希センパイを認めないのか。

「紗希ねえは、わたくしを応援してくれています。運営だって、本当のところは手伝ってくれてもいます。でも、絶対にそのことを表には出さな。絶対に、自分には関わるなと言って聞かないのです」

「紗希センパイは、どうしてそんなことを」

「優しい方、ですから。自分のことで、誰かに迷惑をかけたくないのでしょう」

「そんなのおかしいだろ」

だから、あたしは想いをぶつける。
すると。

「ええ、おかしいです。おかしいですわよ。その通りですわ」

堰を切ったかのように、しおりんの口から呪いの言葉が紡がれる。
「でも、どうしようもないんです。紗希ねえは、他の人と何も変わりません。施術を受けて、身体の弱さは克服してます。でも、黒崎家では化け物扱いですわ」

悲痛な思いを、言葉に乗せて。

しおりんは、姉に対する思いを吐露し続ける。

「自分が慕う姉が、泣きながら懇願する姿を、あなたは想像できま

すか」

涙は流していない。それは、副生徒総長、次の当主としての意地か。

それでも、必死に放たれた言葉には、涙の色が滲み出ていた。

「出来ないでしょう。わたくしは副生徒総長です。いじめた生徒を、処分が付することだってできる。いじめた人間を、退学に追い込むことだってできる。でも、紗希ねえはそれを望まなかったんです」
変えられない現実を、しおりんは呪い続ける。

副生徒総長であるのに、権限を行使したいのに。

それでも、姉がそれを望まない。だから、どうすることもできない。

「夕暮れの教室で、『わたしのことで、汐里に迷惑はかけられない』って、いじめっ子に服をはぎ取られて下着姿のまま、泣きながらわたくしの足に縋り付いた大好きな姉の姿を、わたくしは一生忘れません。いえ、忘れられませんわ」

情景が、あたしの頭の中に即座に描写される。

そんな場面に遭遇してしまったら、もし、あたしがしおりんだったら。

あまりの悔しさに、怒り狂っていたに違いない。でも、怒り狂っても、肝心の姉は助けを求めない。

それどころか、逆に気を遣われる。それは、どれだけ悲しいことなんだろう。

「その時わたくしは、心から泣きました。自分の姉は何も悪いことはしていないのに、どうしてここまでされないといけないのか、とでも、これは決まったことなんです。どうしようもなくて、何も変わらない闇なんです」

変わらない闇。

変えられない闇。

姉が好きなのに、好きな姉は救済を求めない。

葛藤の中で生きる、しおりんの辛さが言葉の一つ一つから伝わっ

てくる。

「しおりん……」

「だから、朱音くんが紗希ねえを助けようとするなら。紗希ねえの意思を無視して、何かコトを起こそうとしているのなら、わたくしは反発しますわ」

小さく、しかし重く紡がれる言葉には、しおりんの覚悟が滲んでいた。

彼女たちの背負った苦しみは、あたしの想像をはるかに超えている。

想像もできないところに、彼女たちの苦しみがある。

「彼女の苦しみは、彼女にだけわかること。あなたが干渉するべき領域にないのです」

何も言えず、あたしは俯くことしか出来なかった。

どうしようもない。

何も言い返せない。

だって、あたしはただの人間で、紗希センパイの後輩で。

そこまで、踏み込めていたわけでもない。何も出来てないんだ。

「今、これを言おうとは思っていませんでした。……でも、良い機会ですので、言っておきます」

心を黒く染めるあたしなんて、全く知らない、といったように。

しおりんは、処刑の言葉を次々と披露してゆく。

「あなたと付き合っても、紗希ねえは幸せになれない」
心に響く、しおりんの声。

「……っ！」

どうして、そんなことを言うのか。

顔を上げて、しおりんの表情を見つめると。

副生徒総長として、責務を全うしているときの顔。

まさしく、黒崎家次期当主としての決意を浮かべていた。

「紗希ねえには、朱音くんは眩しすぎる。あなたは、紗希ねえに夢を与えてしまう」

「夢を与えちゃ、ダメなのかよ」

「ええ、ダメです」

「……」

断固として言い切る、しおりん。

夢も与えられず、夢を求めず。

そんな生活を、紗希センパイはどうして、強いらなければならないいけないのか。

「絶望の淵に生きてるのです。紗希ねえは。朱音くんが希望を与えれば、紗希ねえは闇に戻れなくなる。光の世界を望んでしまう。そうなれば、傷つくのは紗希ねえなんです」

「あんまりだろ、そんな言い方。なんで、そんなことを言うんだよ。昔は応援してくれてたのに」

「女の子相手の恋愛なら、絶対に成就することはないだろうと、思っていたからですわ」

「……本当かよ」

最悪だ。

そんなことを思っていたなんて。

もし本当なら、あたしを支えてくれていたあのしおりんは、いったい何だったんだ。

「本当ですわ。……でも、今の朱音くんは男の子。もしかすると、成就してしまうかもしれない。そうなってしまうえば、傷つくのは紗希ねえです」

ショックを受け、失意の底に沈むあたしに。

「はつきり言っておきます」

しおりんは、一言一言、ゆつくりと。

「あなたと付き合えば、紗希ねえは不幸になる」

あたしに理解させるように。

「わかりましたか？」

言葉を紡いでゆく。

「干渉するなど、言っているのだから、干渉しないのが一番なんです」

諭すように、諦めさせるように。

「朱音くん、わかってくれましたか」

酷く残酷で、優しく、あたしの心を絞め殺す感覚を与える。

応援してくれるとか、支えてくれるとか。

あたしの考えが、甘っちょろかったのだろうか。

そんなことはない。

あたしは、紗希センパイが好きなんだ。

「わかんねえよ、意味がわかんねえよ……」

「紗希ねえのためなんです」

「……」

だから、何を言われても。

あたしは、決して思いを捨てない。

そう、決意をしたのだけれども。

「もしも、それでも、朱音くんが紗希ねえを幸せに出来ると言うのなら」

「……？」

その空気を察したのか、しおりんが厳しい視線を浴びせながら語る。

「誓いを立ててください」

「何をすりゃいいんだよ」

「何もしなくていいですわ」

きっぱりと、言い切るしおりん。

意味がわからない。どうということなのか。

「？」

「わたくしは、姉が大切です。とても大切に思っています」

「ああ、わかってる」

シスコンだ、と繰り返し述べている。

その言葉が本当なら、しおりんは姉が大好きだ。

姉が大切だからこそ、姉の望みを聞き入れてきた。

それがどんな望みであっても、聞き入れてきたのだ。

彼女が背負った覚悟は、あたしが想像するよりも重く、深いだろう。

「もしも、理不尽な幸せを与えて、その後にそれを奪って、絶望の淵に叩き落としたとしたら、紗希ねえは悲しみ、自分を責め、やがて自決に至るでしょう」

「どうしてわかるんだよ」

「妹、ですから。姉の苦しみは、手に取るようにわかります」

根拠は薄い。

薄い、そうなるのだろう。

「そうかい」

しおりんがそう語るなら、そうなってしまうのだろう。

紗希センパイの心は、繊細で脆い。

ぱつとある日消えてしまっても、全く違和感はない。絶対にそんなこと、ありえないと信じたいが、違和感自体はない。

「はい。それで、もしも、紗希ねえが死んでしまったら」

「たら？」

「わたくしは、朱音くんを一生許しません」

今まで見たことのないような、殺意に満ちた瞳。

かつてあたしの前では露見させたことのないような、決意に満ちた瞳。

「逆に、あなたに殺されてしまうかもしれない。それでも、わたくしは絶対に許さない」

本気だ。

しおりんは、本気で言っている。

嘘でも偽りでもなく、心からそう言葉を紡いでいる。

「あなたを殺して、それから死ぬ。それくらいの覚悟は、出来ています。朱音くんはどうですか。生半可な気持ちで、紗希ねえに手を

出そうとしているのでは、ありませんか」

生半可な気持ちで、紗希センパイと付き合おうとしているわけじゃない。

好きになったのは、そりや些細なことだったかもしれない。

でも、それだけじゃないし。そんなことを言われる筋合いなんてない。

言いたいけれど、言葉にできない。

させてくれない。

「女の子が好きだから、紗希ねえが好きになった。可愛くて綺麗で幻想的な紗希ねえを好きになった。それだけじゃないのですか。見かけだけで、好きになったわけではありませんか」

絶対に、そうじゃない。

そう言い切れるのだろうか。

あたしは、あたしを認めてくれる、紗希センパイが好きになっただけ。

本当に、紗希センパイが好きなんだろうか。わからない。本当の心は、自分ですらもはっきりしていない。

「……」

「ほら、言い返せないでしょう。きっと、その通りですわ。わたたくしを嫌ってくださるなら結構。ぜひ、嫌いになってくださいませ」

返答に詰まるあたしを尻目に。

しおりんは、帰り支度を始める。

勝利宣言か、敗者であるあたしを笑うつもりか。

いずれかはわからない。

でも、あたしは言い返せなかった。あたしの負けだ。

「……もう一度、頭を冷やして、自分でゆっくりと考えてくださいませ。わたくしの大切な、大事な方として」

でも、あまりにも言葉が過ぎる。

少し、さすがにあたしも力チン、と来た。

絶交だと、言い切ってやるのは簡単だ。

しかし。

しおりんが去ってゆく瞬間、ぽろりと瞳から一粒の涙がこぼれ出るのを見た瞬間、何も言えなくなってしまうのだった。

そして、しおりんが去っていった後。

「はあー……」

自問自答する。

あたしが好きだったのは、紗希センパイなのか。

あたしが好きだったのは、女の子で、可愛い女の子、だったんじゃないのか。

しおりんに言われた言葉が、重くのしかかり続ける。

ため息しか出ないなあ。はあ。

「あら、汐里ちゃん帰ったの？」

「うん……」

「どうしたの、酷い顔よ？」

様子を見てリビングにやってきた母さんが、先ほどまでしおりんが座っていた椅子に座り、あたしに優しく語りかけてくる。

「酷い表情って言ってほしいなあ」

「酷い表情の顔ね」

「何も変わってないよー。はあ……」

こんな冗談にも、返す元気がない。

そんな冗談に、付き合っている余裕がない。

「どうしたの。お母さんに、言ってみなさい」

事の重大さを察知したのか、母さんが尋ねてくる。

「うー？」

「ほら、聞いてあげるわ」

「じゃあさ、お母さん」

聞いてくれるというのなら、聞いてもらおう。

あたしだけじゃ、このまま詰まってしまうそうだ。

「うん」

「こんなことがあったんだけど」「
だから、言うべきではないことは隠し。
あたしが、紗希センパイのことが本当に好きなのか。
そのことについて、尋ねてみる。」

数分後。

「ってわけ。どうしたらいいんだろう、あたし
何度も頷き、母さんは話を聞いてくれた。」

「あたしじゃなくて、俺。しっかりなさい、朱音」

「うん……」

「朱音は、女の子に戻りたいの？」
根本的な問題だ。

あたしは、どう思ってるんだろう。

最初は、男の子になれば、紗希センパイと付き合えると、簡単に
思っていた。

でも、今は違う。そんな単純な問題じゃないと、気づいてしまっ
た。

「うーん、わかんない。どうなんだろう」

「先に言っておくわね」

「うん？」

先ほどまで、笑みを浮かべていた母さんの表情からは、笑いが消
え。

しっかりと、あたしを見据えていた。

「朱音は、ずっと男の子のままよ。もう戻れないわ
ずっと、男の子のまま。」

もう戻れない。

なんで、母さんがそんなことを言うのか。

「え？ どうして、言い切れるの？」

「そりゃ、言い切れるわよ」

「なんで？」

純粹に意味がわからなかった。

だから、尋ね返した、それだけのことだ。

「だって、お父さんも女の子だったんだから」

だから、その言葉には頭をハンマーで殴られたかのような、衝撃を与えられた。

「え？」

父さんが、女の子だった？

どづいづいと？

最終話前編 『それでも、あたしは』

頭が混乱している。

何てことをカミングアウトしてくれるのか。

母さんはまだ帰ってこない父さんに電話をし、

「……お父さん、中国に出張だって。帰ってくるのは明日だわ」
そして、残念そうに肩をすくめてあたしを見つめた。
肝心のあたしはと言つと。

「……」

あまりのことに、何も言えずにいた。

「お父さんの事情は、またお父さんに聞きなさい」

真実味を帯びた、母さんの言葉。

本当に、父さんは女の子だったのだろうか。

「母さん」

「なあに？」

「本当なの？」

尋ねてみる。

「朱音は、どう思う？」

「信じられない」

「でも、朱音も男の子になったでしょう？」

「そうだけど、そうなんだけど」

何もおかしいことじゃない。

おかしいことだけど、つい最近、自分の身に起きたことだ。

だから、認めざるをえない。そして、他の人にもこの現象が起こ
つていても、おかしいことじゃない。

「理由はわからないわ。何にもわからない」

「……」

「突然、男の子になったのよ。本当に、突然ね」

「それは、いつの話？」

「そうね……高校生のころ、かしら」

「お爺ちゃんたちは、何て言ったの？」

父さんと母さんが、あたしを受け入れてくれたように。

彼と彼女の両親は、受け入れてくれたのだろうか。

「ただただ驚いてたわ」

「そうなんだ……」

そりゃそうだろうなあ。

「まあ、理解のある親で良かったわ」

「なかなかいないと思うけどね」

「そうね」

少し、あたしは気になることができた。

父さんと、母さんのれないについての話だ。

「……その、父さんと母さんは付き合ってたって言ってたけど」

「ええ。女の子同士よ。今まで隠していて、ごめんね」

「……ううん、話してくれてありがとう。でも、そうだったんだ……」

「……」

今まで、知らなかった。

父さんと母さんは恋愛結婚で、小学校のころからの幼馴染だとは知っていた。

けれども、まさか女の子同士だったなんて。誰も教えてくれなかったし。

だから私が、『女の子が好きだ』、と言っても反対もされずに、あっさりと受け入れてくれたのだろう。

「禁断の恋っていいよねー、きゃあー、とか言ってたら、お父さんが男の子になったんだもの。そりゃ、焦ったわ」

「そんなあっさり？」

「ええ、あっさりね」

「それから、一度も戻ってないの？」

「数日間とか、たまには戻ってたわね」

数日間。

あまりにも短すぎる。

今まで、ずっと女の子のままだと思っていたのに、あの環境はもう戻って来ない。過去の日々の中に沈んでしまった。

「本格的に元通り、にはならないんだ」

「そうね。今じゃあもう、ずっと男のままよ」

「じゃあ、戻れないんだ……」

何とも言えない感覚が胸を支配する。後悔ではない、不安だ。不安が全身を支配した。

「そうね」

「そうなんだ……」

「朱音」

気持ちを沈めるあたしに、母さんが語りかけてくる。

その声色は、優しく包容力に満ちていた。

「うん？」

「あなたは、センパイが好きなのでしょう？」

「うん」

「好きという気持ちは、変わらないのでしょうか？」

「そうなんだけど、でも」

「でも？」

気持ちは変わっていない。

変わっていないはずなのだけれど。

「あたしは本当に、紗希センパイが好きだったのかなあ、って」

しおりんの顔が、あたしの頭の中に浮かぶ。

あたしは本当に、紗希センパイが好きだったのか。見せかけの姿だけを好きになったんじゃないのか。本当は好きじゃなかったんじゃないか、と。

「どついう意味かしら？」

「よくわかんないの。わかんないけど……」

「とにかく、朱音」

「うん」

「何とも言えないわ。あたしには、何とも言えない。だから、ゆっくりと考えなさい」

「そんなー」

救済を求めていたのに、与えられた言葉は突き放すものだった。ゆっくりと考えろと言われても、何をどう考えればいいのかすらわからない。どん詰まりの中にいるのに。

「あたしは、元々あの子が好きだったわ。あの子も、あたしを好きでいてくれた。誰に何と言われようと、あたしたちは思い合ってたわ」

あの子、父さんのことだろう。

正真正銘の、女の子同士のカップルだ。

周りからは、悪口や陰口を叩かれただろう。

「……」

それでも、二人は寄り添ってきたのだ。

「だから、あの子が男の子になってからも、関係は変わらなかった。だって、あたしが好きになったのは、あの子だもの。女の子だろうが、男の子だろうが、あたしは構わなかった」

「でも、女の子以外に興味あったの？」

「そうね、朱音」

「うん」

どうして尋ねてみたのか。

それは、単純な疑問だった。

「全くなかったわ。男の子になんて、興味はなかった」

「だよね……。なら、父さんのことは嫌いになるんじゃないの？」

「どうして、そう思ったの？」

「ええと、何となくなんだけど」

女の子好きの女の子が、男の子を好きになる。

ありえないんじゃないか、と思ったのだ。

「人間が好きになるのは、人間でしょう。あなたは、性別を好きになるの？」

「……そうじゃない、と思うけど」

世間には、様々な人がいる。

トラウマがあつて、男の人が嫌いな人もいる。その逆もしかり。

「好きになつた人間が、たまたま女の子か、男の子だった。性別なんて、後からくつついてくるものじゃないの？」

母さんの考えは、多様な考えの一つだ。

異を唱える人だっているだろう。

ありえないだろう、と叫ぶ人もいるだろう。

それは、あたしだって例外ではなかった。

「それは、どうなんだろう」

「共感してもらえとは思わないし、させるつもりはないわ。でも、少なくともあたしはあの人を愛してたし、今も愛してる」

でも、一つだけ感じ取ることが出来た。

真摯に想い人のことを語る、気恥ずかしいばかりの母さんの姿を見つめて、あたしは何だか、暗い気分には微かな光が差し込んだように思った。

「……」

「結局、二人の気持ち次第なのよ。気持ちが通じてさえいれば、どんな相手でもうまくいくわ。異性同士でも、同性同士でも、ね」

「母さん……」

好きになつたのは、性別なのか。それとも本人か。

二人の気持ち次第。

その言葉は、あたしの背中を押してくれた。

「だから、考えなさい。朱音。それで、悩みなさい。悩み続けた先に、あなたの素晴らしい未来があると思うわ」

「……うん。ありがとう、母さん」

「あなたは、あなたの道を進めばいい。一度しかない、短い人生ですもの。楽しんで、あなたがやりたいように生きればいいわ」

「ありがとう、母さん！」

女の子にはもう、戻れないかもしれない。

それでも、悔やんでばかりではいられない。
たった短い、それこそ数十年の人生なんだ。
やりたいようにやって、生きればいいじゃないか。今までそうし
てきたんだ。

「本当、親子で手間のかかる子だわ。でも、そこが可愛いんだけど
ね」

そう語ると、母さんは唇をにいと上げ、温かい笑みを浮かべた。
でも、まだ完全には、想いが固まらない。
後一步、何かが必要だった。

翌朝。教室でのこと。

しおりんは迎えに来てくれなかったし、目を合わせても逸らされ
る。いわゆる無視という状態だ。

今までずっと二人で行動していたのに、突然の決別に、クラス中
は訝しむ視線をあたしに向けていた。

『ああ、ヤンキーがやらかしたのか』。とか。
そんな感じの。

「おい、ヤンキーがやらかしたのか」

茶化す、山岡の声。

こいつ、テンプレートそのままじゃないか。

「ちげーよ、バカ」

「そうなのか。何があっただよ」

「何もねーよ」

山岡に話したところで、状況は何も変わらない。
だから、何も話すつもりはなかった。
でも。

「ウソつけ。あいつのあんな顔、久しぶりに見たぞ」

「わかるのか」

「そりゃ、友達だからな」

「……そうか。なあ、山岡」

少し、聞いてみたいことが出来た。

「ん？」

「もしも、もしもだけどな」

「おう」

「お前、女の子になったらどうする？」

「なんだよ、切り取るってことか？」

股間を指さしながら、笑い飛ばす山岡。軽く流してやろう。

ここで反応しても仕方ないし。

「いや、そういうことじゃない」

「？ どういうことだよ」

「そのままの意味だよ。身体が女の子になったら、お前はどつする？」

「いいじゃねえか、おっぱい揉み放題だぜ」

樂しげに語る彼に、

「すぐに飽きるぞ。大したもんじゃねえよ」

あたしは、素直な感想を伝えてやる。

「マジで」

「ああ」

すると、何だかがつくりと肩を落として落ち込んでしまった。なんで落ち込んだのかはわかるが、なんであたしに言われて落ち込んだのかは不思議でならない。

「まあいいや。何だか気が晴れたわ」

とにかく、しょうもない話を交わしたただけだけれど。

それは、気晴らしになった。やっぱり、息抜きて大事だ。

「おう。それなら良かった。何だかお前、顔白いからな」

「寝てないんだよ。考え事してて」

「そうか。チンピラのボスはちげーなあ」

「その話もう広まってんの？」

流れで、引き受けてしまったボスの話。

まさか、本当にやることになるとは思わなかった。

「おう。かなり広まってるぞ」

「マジかー」

「なるようになるだろ。頑張れよ」

「ああ……」

まあ、その通りだ。

なるようになるだろうし。でも危険はある。危険はあるから、助けを求めておかないといけない人がいる。

安全を確保するためにはまず、しおりんと仲直りしないとなあ。

そして、放課後。

いつも通りに、こつそりと英語研究会の部室に入る。何だか視線を感じた気がするけれども、しおりんのものだろうか。

「あれ？ 来てないんだ」

中を見てみると、紗希センパイはいない。

しおりんがいないのは、多分副生徒総長の仕事があるからだろうし。

「……ふう」

椅子を引き、とりあえず着席。

うん。せつかくだし、考え事をしていよう。

「……朱音くん？」

と思つたら、来客だ。

望んでいた人が、やってきた。

「こんにちは、紗希センパイ」

「はい。こんにちは。……あの」

いつも通り、あたしの向かい側に座るやいなや、口を開いて語りかけてくる。

何だろう。

「どうしたんですか？」

「汐里と、喧嘩してますよね」

「へ？ 喧嘩？」

「えと、汐里と、朱音くんです。喧嘩してますよね？」

「ど、どうなんでしょう。どうしてそれを、紗希センパイが？」

「……汐里、昨日はわたしに泣きついてきたんです」
びっくりした。

しおりんが、紗希センパイに泣きつくなんて。

「そんな大げさな」

去り際、確かにしおりんは泣いていたけど。

正直、泣きたいのはあたしのほうだけ。泣かせてくれよ。

「朱音くん」

「は、はい！」

冗談で言ってるつもりかと思ったけど、紗希センパイはマジだ。

これは本気で怒っている目だ。深い血のようなワインレッドの瞳は、静かな怒りに満ち溢れていた。

「わたしは、怒っています」

「……」

「大切な妹なんです。大切に扱ってあげてください」

やばいなあ、紗希センパイ勘違いしてる。

あたしとしおりんが喧嘩して、それでしおりんが泣かされたもの
だと思ってる。

実際は、紗希センパイのことで言い争いをして、負けたのはどっ
ちかと言えばあたしただけだなあ。

「……大げさ、ですよ」

「何があっただんですか」

「それは、えと、あの……その……」

「言えないんですか？」

言えるわけがない。

訝しみながら尋ねてくる紗希センパイに、罪悪感を覚えながら。

「……すみません」

とにかく、拒絶するしかない。

だって、言えないんだから。想いを伝えることは、まだできない

し。

「朱音くんは、きつと優しい人なんです。そんな優しい朱音くんが、どうして汐里を泣かせたりなんてしたんですか」

「違うんですよ、それは」

「だめだ、勘違いしてる。」

「あたしが、しおりんを攻撃したと思ってる。」

「そんなことはないのに、それを説明するには、相手が悪すぎた。」

「何が違うんですか？」

「……やっぱり、言えません」

「汐里、泣いてました。理由を尋ねても、『わたくしが悪い』の一点張りです。何があったのですか。どうして汐里は、そんなことを言ったのですか」

「怒り心頭、といった感じに紗希センパイは、机に乗せた手を震わせながら語る。」

「その怒りを、もう少し外に向ければいいのに。自分に向ければいいのに。そんなことを思わせるくらい、静かだけれども嵐のような憤怒の様相だった。」

「しおりんは、理由を言わなかったんですか」

「ええ。何も」

「何度も、尋ねたんですか」

「ええ。そうでなければ、朱音くんを責めたりなんてしません」

「喧嘩の理由は、大きく分けて二つ。」

「一つは、紗希センパイを救済しようとしたこと。」

「二つは、紗希センパイを思い続けることへの彼女の異論。」

「……ありがとう、しおりん」

「でも、しおりんはどちらも隠してくれた。」

「ただ、想いをひた隠しにしてくれた。」

「トラブルを回避出来たこと、そこは不幸中の幸いだった。」

「はい？」

「何でもないです。えと、紗希センパイ」

「はい」

さて、どうやって説明しようかな。

「喧嘩じゃないんです」

「わかりました。では、何なんですか」

「方向性の違い、です」

「今は、そういうギャグを飛ばす場面ではありません」

ギャグじゃないんだけどなあ。

割と、本気の話なんだけどなあ。

「違うんです、本当なんです」

でも、どう説明するか。どこまで説明するか。

「……説明していただいても？」

「詳しく、説明することはできません」

訝しむ紗希センパイを前に、あたしは悩みながら考えていた。

どうしようかなあ。どのようにしようかなあ。

「なぜ」

「……」

「どうしてなんですか、朱音くん」

「……」

悩むあたしを前に、紗希センパイは厳しい視線と口調で問い詰め
てくる。大事な妹の問題だ。それは、気が気でならないだろう。

あたしはあくまでも、転校生。しおりんの友人ということにはな
っているが、紗希センパイとはそこまで親密な仲ではない。

「わたしには、聞かれたくないこと、なんですか？」

「率直に言っと、そうです」

やっぱり、素直に話すべきか。

話さないと、もっと話がこじれてしまいそうだ。

「わたしの、容姿のことですか」

「違います。でも、近いかもしれません」

「わたしの、将来についてですか」

「立派なお嫁さんになってください。違います」

少し、気を紛らわすためのジョークだったが、軽くスルーされてしまった。

紗希センパイの顔が怖い。

「……じゃあ」

やがて、ワンクッション置き。

「……いじめのこと、ですか？」

彼女は、小さな声で、小さな唇から言葉を紡ぎだす。

「そう……です」

「それで、汐里と揉めたんですね」

「それもあります」

「それも？」

「まずい。」

まだ、想いを伝えるべきじゃなかった。

誤魔化さないと。

「いえ、そうです」

「先にあの子のために言っておきますが、わたしがあの子に何もするな、と言っているのです。もしも、あの子が冷たい子だと思っているのなら……」

悲しい表情を浮かべて、紗希センパイはあたしに忠言してくる。

が、そんなことは問題じゃない。しおりんは、そんな子じゃない。

よく知ってる。

「知ってます」

「どうして……」

「何もかも、知ってます」

どうして、しおりんが、紗希センパイを庇わないのか。

普通に考えれば、しおりんは紗希センパイを庇うはずだ。姉だから。

しかし、しおりんは庇わない。それは、紗希センパイの願いだからだ。

「聞いたんですか」

「はい」

「教えたんですか」

「はい」

「朱音くん、あなたは本当に……」

これは、黒崎家の病理だ。

どうしようもない、病理現象だ。

まさか、しおりんがそれを語るとは思わなかったのだろう。紗希
センパイは、驚きの表情を浮かべていた。

「俺は、そんなことは間違ってると思います」

でも、そんなことはどうでもいい。

あたしは、想いを伝えるだけだ。

「……」

「紗希センパイには、幸せになる権利がある」

「ありませんよ、そんなもの」

「ありますよ」

ない人が存在するはずがない。この世界中に存在する、どんな人
でも、幸せになる権利はある。幸せになる機会が、与えられないだ
けだ。

紗希センパイには、幸せになる機会も権利もあるのに。

「ありません。わたしは、黒崎の出来損ないですから」

「出来損ないなんかじゃないです。紗希センパイは、立派な人です。

一人前の、俺の尊敬する先輩です」

「そんな価値、ありませんよ。こんなものに」

「いいえ、あります」

すると、紗希センパイは自嘲の笑みを浮かべた。

「……朱音くん、もういいでしょう」

「はい？」

「わたしのことは、もういいでしょう。汐里と早く、仲直りしてく
ださい」

どうして、この人は自分の問題をどこかへと、放り投げようとする

るのか。

苦しんでるのは自分なのに、どうして、しおりんの事ばかりを考
えるのか。

「嫌です」

だから、あたしは即答する。

「え……？」

「このまま、しおりんと仲良くするわけにはいきません。だって、
考えも一緒じゃないし、このまま妥協するなんて、俺はやです」
妥協なんてしたくない。

あたしは、あたしの信じる道を進みたい。

「そんな、だめです。わたしのせいで、そんなことは」

「偉そうなことを言わないでください。これは、あなたのせいじゃ
ない。俺が、俺の意思で選んだことですから」

「……意地悪しないでください」

屁理屈に聞こえるかもしれない。

意地悪に聞こえるかもしれない。

それでも、あたしは、この選択が正しいと信じている。

「意地悪じゃないです」

「……」

だからこそ、強気に主張し続ける。

やがて、紗希センパイは視線を机に落として、俯いてしまった。

表情は見えない。見えないが、ひるむわけにはいかない。

「もしも、仲直りしてほしいなら、しおりんに助けを求めてくださ

い」

「……」

助けて欲しいと、言ってくれ。

お願いします。紗希センパイ。

心の中で、強く願い続けるが。

彼女は、俯いたままあたしの目を見ずに言葉を紡ぐ。

「その後に、俺に助けを求めてください。俺はあなたを全力で助け

ます。何があっても、何が起きても、絶対に助けます」

「……嘘ですよ」

「嘘じゃないです。全部、本当のことです。絶対に助けます」

あれ、何だかうまくいくような気がする。

声のトーンも、そこまで悪いわけじゃない。どこか、希望に絶えうと悩んでいるような、そんな声だった。もう少しだと、あたしは思っていた。

でも。

「何にも、知らないくせに」

「……はい？」

「何にも、黒崎の事情を何も知らないあなたが、そんなことを気軽にこのうのうと言わないでください！」

「……ですけど」

顔を上げ、あたしを見つめる紗希センパイの顔は。

今までに見たことがないくらい、世界を恨む表情に満ちていて。決して救われることがないと知っている、死刑宣告後の囚人のようだった。

「黒崎本家の人間は、優秀で優美で可憐でなくてはならないんです！ わたしみたいな出来損ないなんて、黒崎に置いてもらえるだけありがたいんです。それなのに、汐里に迷惑なんてかけられないんですよ！」

透き通った、水晶の声が英研の部室に響く。

感情をこめて、叩きつけるように叫ぶ紗希センパイ。

瞳には、微かに水分が含まれていた。

頬を赤く染めて、力いっぱい言葉を紡ぎ続ける。

「……」

「汐里は、これから当主を目指すんです。いずれ、わたしなんて遠くに捨て去って、大空に羽ばたくでしょう。それを、わたしみたいな足かせが邪魔することで、この輝かしい未来が失われてしまう。そんなこと、わたしは嫌なんですよ！」

「どうして、そんなことを思うんですか」

絶対に、しおりんはそんなことを思わない。

「姉ですから。役立たずの、姉ですから」

「……」

でも、紗希センパイはかたくなに、自分が荷物になると感じている。

「こんなの、絶対に間違ってる。」

「わたしのせいで、汐里が泣く。そんな姿なんて、微塵も見たくないんです」

「でも」

だから、反論しようとするのだけれども。

有無を言わせぬ態度で、彼女は迫ってくる。

「朱音くん」

「……はい」

「わたしは、尊敬されるような人じゃありません」

即座に否定したい

だって、この人は尊敬に値する人物だから。

「でも、いじめに耐えて」

自己犠牲の精神だろうが何だろうが、持った思いを貫き通すのは、簡単なことじゃない。それをやりきっているのだから、どんなことであれ尊敬に値する。

でも。

「耐えられていると、思ってるんですか？」

「え？」

「妹のことを思って、全部押し殺してるだけなんですよ」

紗希センパイは、乾いた笑みを浮かべて、あたしを嘲笑する。

今までに見たことがないような、憎しみと悲しみに満ちた笑みだ。ワインレッドの瞳から毀れ落ちかけているのは、水晶のように透き通る涙。

「筆箱を隠されて、ノートを破られて。それでも耐えていたら、今

度は服を脱がされて。身体に攻撃できないからって、心を削つてくるんですよ。それでも、押し殺すしかないんです。わたしは、それしかできないんです」

「……………」
悲しみを通り越して、全てを諦める。

その姿が、ありのままだと自分に思い込ませる。

諦観の塊が、目の前の紗希センパイだった。

「あなたが助けられなければ、わたしは汚されていたでしょう。でも、遅かれ早かれそうなるんですよ。わたしにはわかるんです」

「……………」

でも、そんなことを彼女の口から聞きたくなかった。

あたしは、言葉にならない言葉を必死に紡ごうとするが。

「わたしはもう、どうしようもない、どうしようもない人間のクズなんだって。だから、しょうがないんだって」

「なんで、そんなことを……………言うんですか……………」

うまい反論が頭に浮かばない。

こんな全てを諦めきった人に、あたしは何を言えばいいのか。

苦しみに心を傷つけていると、紗希センパイが更なる追い打ちをかけてくる。

「あなたよりも前に、わたしを助けられると言った人がいました。同じ名前の、女の子です」

青木朱音。

ただのチンピラで、ただの暴力女で、ただのよわっちい、見栄っ張りの女。

まさか、どうしてここであたしの名前が出るのか。

「……………」
身構える。どんな言葉が飛び出すのか。

やがて、紗希センパイは息をのんで、ゆっくりと言葉を紡ぎ始める。

「でも、その人はいなくなりました。わたしを助けたことで、

制裁を受けたのでしょうか。わたしを見捨てて、どこかへと行ってしまった」

制裁？

そんなもの、受けていない。

見捨てたんじゃない。だって、あたしはここにいる。

「責めるつもりはないんです。彼女はきっと、転校先で幸せにやっているでしょう」

転校なんてしてない。

でも、見せかけはそうだ。見かけ上は、あたしは転校した。

でも、それは紗希センパイのせいじゃないし、誰のせいでもない。

「ただ、わたしは後悔してるんです。もしも、わたしが助けると言わなければ。彼女の差し出す手を取らなければ、あの子は転校していかなくても、良かったんじゃないかって」

「その人は、いじめられていたわけじゃないと思います」

「誰が、それを証明できるんですか」

「しおりんです」

「あの子は、朱音ちゃん……その人の親友ですから。きっと庇うでしょう」

だめだ。そう言われてしまったら、どう言い返せばいいのかわからない。実際しおりんは庇ってくれるだろうし、嘘だって取り繕ってくれるだろう。

猜疑心に満ちた、今の紗希センパイを説得することなんて出来やしない。

「……」

「だから、わたしはもう誰の手も取りません。誰の手も、決して借りたりしません」

こうなったら、あたしの言葉は届かない。

彼女は耳をふさぎ、目を閉じ、全ての救済を拒絶した。

過去のあたしが、紗希センパイを苦しめている。心が弱る思いがした。

「それが、わたしの存在理由。存在価値なんです」

「それで、いいんですか。紗希センパイは本当に、そんなのでいいんですか」

それでも、このままなんて終わりたくない。

だから、必死に抵抗を続ける。

「いいんですよ。朱音くん。あなたが気を病むことはありません。

あなたが笑っているだけで、わたしは幸せなんです。心を押し殺せるんです」

「……」

だめだ。どうして、紗希センパイはこんなに嬉しそうに笑うのか。そんな表情をされてしまったら、あたしは何も言えなくなるじゃないか。

「汐里と、仲直りしてきてください。多分、今、あの子は落ち込んでいるので、屋上にいますよ」

「……はい」

あたしだけの力では、何も変えられない。何もできない。

席を立ち、英語研究会の部室を出ようとしたところで、

「どうして、あそこまで感情的になってしまったんでしょう。わたしはやっぱり……」

紗希センパイは一人、小さく言葉を呟いたが、よく聞こえなかった。

聞き返すと、

「どうしました？」

「いえ、何でもありませんよ。行ってらっしゃい」

そう語り、彼女はにっこりと消え入りそうなほど小さく、頬を緩めて笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8870y/>

おとこのおんなのこ

2011年11月28日11時51分発行